

## 第2部 フォークランド戦争の軍事的側面

### 第1章 イギリス軍およびアルゼンチン軍の状況

#### 第1節 アルゼンチン軍

憲法により軍の最高司令官は大統領と規定されており、大統領は議会から独立した非常に強大な権力を握っている。1967年の防衛組織再編により国防大臣はそれまでの3軍の長から、陸海空軍の司令官と同等の地位に変更され、3軍の司令官はそれぞれの軍の指揮について直接大統領に責任を負うようになった。

アルゼンチン軍は、一般的な陸海空軍の3軍種のほか、陸軍の指揮下にあり国境警備が基本任務の国家憲兵隊（連邦警察）と、海軍総司令官が統制し海難救助と沿岸警備等が任務の沿岸警備隊（州海軍）を保有している<sup>1</sup>。

アルゼンチンは、1816年スペインから比較的血を見ることなく独立した。アルゼンチンは、近隣諸国等と領土に関し多くの主張の相違があり、それらの国との関係は概して良好なものではなかった。しかし他国と戦争状態になったことは長期間なく、フォークランド戦争はアルゼンチンにとって1865年から70年のパラグアイ戦争（3国同盟戦争）以来112年ぶりの外国との戦争であった<sup>2</sup>。

フォークランド戦争時のアルゼンチン軍は、1981年の国防予算で比較すると世界で第24位（イギリスは6位）、予算規模はイギリスのその約11パーセントであった。アルゼンチン軍は一般的な陸海空軍3軍のほかに、陸軍の指揮下にあり国境警備が基本任務の国家憲兵隊（連邦警察）と、海軍総司令官が統制し海難救助と沿岸警備等が任務の沿岸警備隊（州海軍）が存在する。アルゼンチンの憲法下では大統領が全軍の最高司令官であった。そのため大統領は、議会から独立して非常に強大な権力を握っていた。1967年以前では、国防大臣が大統領にかわり陸海空3軍の次官を通じて、全軍の管理に大きな責任を持っていた。1967年の防衛組織再編により、3軍の次官は廃止され国防大臣は、陸海空3軍司令官と同等の地位に格下げされた。3軍の司令官は、それぞれの軍の指揮管理について直接大統領に責任を負うようになった<sup>3</sup>。

アルゼンチン軍の中で問題点の1つは徴兵制度にあった。アルゼンチンの男性は、19歳の誕生日を迎える年に、1年間（実質10カ月）軍務に服する義務があった。軍務終了後、予備役となり国家の非常事態に招集を受ける義務があった。アルゼンチンの部隊の年間の業務は1月に始まり将校や下士官は、その年の被徴兵者を受け入れる準備を行う。アルゼンチン軍には、兵の階級を持つ志願兵の制度は存在しなかった。歩兵連隊では通常2月には、その年の被招集兵がそろい訓練を行うが、その年の終わりが近づくと被招集兵の解役が始まる。被招集者の地位は低く昇進は全くない。フォークランド戦争のとき、アルゼンチン陸軍の兵は、1963年生まれの者で占められていた。陸軍では総員約130,000名中約90,000名が、海軍では

<sup>1</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, pp.18-19.

<sup>2</sup> Adrian English, *Armed Forces of Latin America: Their Histories, Development, Present Strength and Military Potential* (London; Jane's, 1984), pp. 18-19.

<sup>3</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, pp. 20-21; Stockholm International Peace Research Institute ed., *World Armaments and Disarmament SIPRI Yearbook 1982* (London; Taylor & Francis, 1982), pp. 140-145.

総員約 36,000 名中約 18,000 名が、空軍では総員約 19,500 名中約 10,000 名が徴兵による兵であった<sup>4</sup>。

この徴兵制の欠点は、中心にプロフェッショナルな将校と下士官がいるにもかかわらず、部隊が永久の初年兵訓練組織になることであった。編成部隊としての訓練はめったに行われず、ましてや諸兵科連合訓練は行われていなかった。毎年初めの数カ月間は特に部隊の作戦能力は低く、まさにフォークランド戦争はアルゼンチン軍部隊の能力が最低の時期に行われた。一部のアルゼンチン軍部隊では、フォークランド諸島への配備を知ってから、1982 年に入った被招集兵を昨年訓練の済ませている予備の者との入れ換えが行われた<sup>5</sup>。

## 第 1 項 アルゼンチン軍の陸上兵力

### a 全般

#### (a) アルゼンチン陸軍

フォークランド戦争当時アルゼンチン陸軍(Ejército Argentina)は、総数約 130,000 名、5 個軍団で編成され、これら軍団は、2 個機甲旅団、1 個機械化歩兵旅団、4 個自動車化歩兵旅団、1 個空挺旅団、3 個山岳旅団、および 1 個熱帯旅団から構成されていた。これら旅団は、32 個歩兵連隊、10 個機甲連隊、12 個野砲群、6 個防空群、1 個群と 5 個大隊からなる工兵隊、ならびに多数の中隊規模の機甲、対空砲および工兵部隊からなっていた<sup>6</sup>。

アルゼンチン陸軍は国を 5 つの地域に区切り、各軍団を配備していた。第 1 軍団は首都ブエノスアイレス(Buenos Aires)を中心とする地域で外国の国境と接していない。この軍団は、1 個機甲旅団、1 個自動車化歩兵旅団等から編成されていた。第 2 軍団の担当地域は、アルゼンチン北東部で、その地域の南東側はウルグアイ(Uruguay)と、北東側はブラジル(Brazil)と、北部はパラグアイ(Paraguay)と国境を接している。この軍団は、1 個機甲旅団、1 個機械化歩兵旅団および 1 個熱帯旅団から構成されていた。第 3 軍団は、長大なアルゼンチン・チリ(Chile)国境のうち北側部分(最北部分は第 4 軍団が担当している)を担当し、1 個空挺旅団および 1 個山岳旅団で編成されていた。第 4 軍団はアルゼンチン北西部を担当し、担当地域の北側の一部はパラグアイと、北側の残りの部分はボリビア(Bolivia)と、北西部はペルー(Peru)との国境と接している。この軍団は 1 個山岳旅団と 1 個自動車化歩兵旅団等から編成されていた。第 5 軍団は南部アルゼンチンのパタゴニア(Patagonia)が担当地域であり、その長大な西側国境はチリと接し、国境線が両国間で問題となっているビーグル(Beagle)海峡をも含んでいる。この軍団は 2 個山岳旅団、1 個機甲連隊

<sup>4</sup> Martin Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London; Viking, 1989), pp. 49-52; *Military Balance 1981-1982* (autumn 1981), p. 92-93.

<sup>5</sup> Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas,'* pp. 52; Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II: War and Diplomacy* (London; Routledge, 2005), p. 82.

<sup>6</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, pp. 32-33.

および1個騎兵連隊から編成されている<sup>7</sup>。

#### (b) アルゼンチン海兵隊

アルゼンチン軍の海兵隊は、1880年に創設された。その後、海軍砲兵大隊となったり、陸軍に吸収されたりしたが、1968年に独立した海兵隊(*Infantería de Marina*)として地位が確立し、上陸作戦を主任務とする部隊となった。この戦争当時の海兵隊の総数は約10,000名、2個海兵隊軍(*Marine Force*)の下に、1個海兵隊歩兵旅団、1個海兵隊歩兵連隊、4個海兵隊歩兵大隊で構成されていた。その他に1個上陸作戦偵察群、1個海兵隊野戦砲兵大隊、1個海兵隊重迫撃砲中隊、1個対戦車中隊、1個工兵中隊、1個上陸作戦車両大隊、1個海兵隊対空連隊、1個海兵隊通信大隊、1個保安中隊が作戦遂行を支援した<sup>8</sup>。

### b 兵器

#### (a) 小火器

歩兵の基本的な小火器は、アルゼンチンでライセンス生産されたベルギー(*Belgium*)の7.62ミリメートル FN FAL 自動小銃と、アルゼンチン国産の9ミリメートル PAM-3 短機関銃であった。また基本的な歩兵支援火器は、これまたアルゼンチンでライセンス生産されたベルギーの FN MAG 多目的機関銃と、アメリカ製の0.5インチ ブローニング(*Browning*)M2 重機関銃だった。迫撃砲としては、国産で口径81ミリメートルおよび120ミリメートルのものを装備していた。近接対戦車兵器として、国産ならびにアメリカ製の口径75ミリメートル、90ミリメートルおよび105ミリメートルの無反動砲と、フランス製の SS-11 および SS-12、西ドイツ製のコブラ(*Cobra*)、ならびに国産のマトーゴ(*Mathogo*)対戦車ミサイルを保有していた<sup>9</sup>。

#### (b) 火 砲

砲兵火力については、けん引式のものにはアメリカ製の M59 155 ミリメートル カノン砲 20 門、イタリア製をライセンスした 105 ミリメートル榴弾砲および第二次世界大戦からのアメリカ製 M101 105 ミリメートル榴弾砲合わせて 200 門、ならびにアメリカ製 M114 155 ミリメートル榴弾砲 90 門を保有していた。自走式のものには、アメリカ製の M109 155 ミリメートル自走榴弾砲 6 門、フランス製 Mk F3 155 ミリメートル自走砲 24 門、および第二次世界大戦中にアメリカで生産された M7 105 ミリメートル自走榴弾砲を 20 門装備していた<sup>10</sup>。

<sup>7</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, pp. 21, 32, 33.

<sup>8</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, pp. 36-58; *Military Balance 1981-1982*, p. 93.

<sup>9</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, p. 33.

<sup>10</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 92; *Military Balance 1982-1983* (autumn 1982), p. 99.

### (c) 装甲車両

アルゼンチン陸軍は、戦車について古いものから新しいものまで多数の種類をそれなりの数量保有していた。それらは、第二次世界大戦中にアメリカで生産された M4 シェーマン (Sherman: 75 ミリメートルまたは 76 ミリメートル砲、重量約 30 トン) を 125 両、同じくアメリカ製の軽戦車 M41 (76 ミリメートル砲、重量 23.5 トン) を 50 両、フランス製の軽戦車 AMX-13 (105 ミリメートル砲、重量 14.5 トン) を 60 両、オーストリア製の駆逐戦車クラッシャー(Kürassier) (105 ミリメートル砲、重量 17.7 トン) を 127 両装備していた。西ドイツで設計されアルゼンチンで製造された当時新型の TAM (105 ミリメートル砲、重量 30.5 トン) 中戦車は、フォークランド戦争前から量産されていたが、戦争中にまだ部隊配備されていなかった<sup>11</sup>。

装甲車および装甲兵員輸送車についても、古いものから新しいものまで多くの種類を保有していた。内訳は、フランス製 VBC-90 (六輪装甲車、90 ミリメートル砲) を若干、フランス製 AML-90 (四輪装甲車、90 ミリメートル砲) を 48 両、フランス製 AMX-VTP (装軌式装甲兵員輸送車) を 300 両、第二次世界大戦中のアメリカ製 M3 ハーフトラック 75 両、ベルギー製 BDX (装輪式装甲兵員輸送車) 5 両、スイス製 モワグ・ローランド(MOWAG Roland: 装輪式装甲兵員輸送車) 120 両、アメリカ製 M113 (装軌式装甲兵員輸送車) 250 両であった<sup>12</sup>。

また海兵隊の装甲車両は、22 両の LVTP-7 (水陸両用兵員装甲輸送車) と 15 両の LARC-5 (水陸両用輸送車) および 6 両のモワグ・ローランドを装備していた<sup>13</sup>。

### (d) 対空兵器

対空兵器としては、歩兵携行兵器として肩撃ち式指令誘導のイギリス製ブローパイプ(Blowpipe)地对空ミサイルを、また重対空火器として西ドイツ製 20 ミリメートルラインメタル(Rheinmetall)地对空砲とスイス製 35 ミリメートルエリコン(Oelikon)地对空砲、イギリス製指令誘導のタイガーキャット(Tigercat)地对空ミサイル、フランス・ドイツ共同開発でのロラン(Roland)地对空ミサイルを装備していた<sup>14</sup>。

### (e) フォークランドに配備された陸上兵力

前述のような兵力を保有しながら、フォークランド諸島に配備された兵力は約 13,000 名であった。陸軍兵力は、3 個旅団 8 個連隊で、そのうち第 IX 機械化歩兵旅団は、フォークランド諸島に一番近いアルゼンチン南部パタゴニアの第 5 軍団から派遣され、第 8 および第 25 機械化歩兵連隊で構成されていた。第 24 機械化歩兵連隊も本旅団の隷下にあったが、この戦争では派遣されなかった。第 X 旅団は、首都のあるブ

<sup>11</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 92; *Military Balance 1982-1983*, p. 99; "TAM(tank)," *Wikipedia* ([http://en.wikipedia.org/wiki/TAM\\_\(tank\)](http://en.wikipedia.org/wiki/TAM_(tank))), accessed on 24. May 2011).

<sup>12</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 92; *Military Balance 1982-1983*, p. 99; "Panhard AML," *Wikipedia* ([http://en.wikipedia.org/wiki/Panhard\\_AML](http://en.wikipedia.org/wiki/Panhard_AML)), accessed on 25. May 2011).

<sup>13</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 93.

<sup>14</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, p. 34.

エノスアイレス州を管区とする第 1 軍団から派遣され、第 3、第 6 および第 7 機械化歩兵連隊で構成されていた。第 III 機械化歩兵旅団は、亜熱帯地方のアルゼンチン北方の第 2 軍団から派遣され、第 4、第 5 および第 12 機械化歩兵連隊で構成されていた。部隊名にいずれも機械化と名がつくが、フォークランド諸島へ派遣されたときは、全部隊装甲車両、自動車等の移動手段を、ほとんど持って行かなかったため、実質は歩兵部隊であった。また第 X 旅団と第 III 旅団は、寒冷地における戦闘訓練の経験がなかった<sup>15</sup>。

アルゼンチン陸軍には、これらの旅団より優良に装備された第 VI および第 VIII 山岳歩兵旅団があり、また寒冷地装備に優れた第 XI 機械化歩兵旅団があった。しかしこれらの旅団は、関係が緊張しているチリとの国境に配備されているためフォークランド戦争に回すことができなかった。第 X 旅団の配置は、首都周辺で他国国境と接しておらず、第 III 旅団の配置は、アルゼンチンと国境を接する諸国の中で一番友好関係が深いウルグアイ国境のため、この戦争に派遣されたのだった<sup>16</sup>。

他に歩兵の兵力としては、アルゼンチン海軍の海兵隊の部隊も参戦している。主な部隊は、海兵隊 2 個大隊、海兵隊 1 個中隊および海兵 1 個小隊である。しかしそのうち 1 個大隊とフォークランド諸島の侵攻時のみに使用され、また 1 個小隊はサウス・ジョージア(South Georgia)島侵攻時に使用されたので、イギリスの奪回時にフォークランド諸島に所在したのは、海兵 1 個大隊と海兵 1 個中隊のみであった<sup>17</sup>。

前述のようにアルゼンチンは、多数の戦車、装甲車および装甲兵員輸送車を本土に保有していた。しかしイギリスは戦闘前に、フォークランド諸島においてイギリスが有効な封鎖を行えば、これら大量の燃料を消費しかつ整備補給に手間のかかる戦車、装甲車等はほとんど配備されないだろうと予測していた<sup>18</sup>。実際フォークランドの戦場に運ばれたものは、AML-90 装甲車が約 20 両程度だけだった<sup>19</sup>。

砲兵としては、アルゼンチンのフォークランド侵攻時に海兵野戦砲兵 A 中隊が使用されたが、侵攻が終わるとアルゼンチン本土に引返し、代わりに海兵野戦砲兵 B 中隊がフォークランド諸島に配備された。装備は、105 ミリメートル・オート・メララ野戦砲(105 ミリメートル OTO-Melara field gun) 6 門で、この砲は 1950 年代に開発されたイタリア製の野戦砲であるが 1980 年代でも十分現代戦に対応できる優秀な砲であった。それでもイギリスがこの戦争に投入した同口径の火砲 L118 軽砲(L118 light gun)には、射程の面で劣っていた。アルゼンチン陸軍の砲兵部隊は第 3 砲兵連隊と第 4 空中機動砲兵連隊で、それぞれ 105 ミリメートル・オート・メララ野戦砲を 18 門ずつ装備し、スタンレーおよびグース・グリーンに配備していた。また戦争後半には 155 ミリメートル砲 4 門が空輸され、第 3 砲兵連隊の指揮下に入った。砲兵兵力では、数だけを見るとアルゼンチンは、イギリスを上回っていた<sup>20</sup>。

対空火器については、海兵隊が最初に 30 ミリメートル対空機関砲 12 門とイギリス製タイガーキャット

<sup>15</sup> Martin Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London; Viking, 1989), pp. 48-49, 52-56.

<sup>16</sup> Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'* p. 56.

<sup>17</sup> Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 47, 296-297; Gordon Ramsey, *The Falklands War Then and Now* (Old Harlow, Essex; After the Battle, c2009), p. 111.

<sup>18</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 81.

<sup>19</sup> Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 566.

<sup>20</sup> Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 47, 60, 297, 301;

地对空ミサイル発射器 3 基をフォークランド諸島に持ち込んだ。その後陸軍の第 601 対空連隊が 2 連装 35 ミリメートル・エリコン対空砲 12 門、20 ミリメートル・ラインメタル対空砲 3 門、タイガーキャット地对空ミサイル発射器 3 基、2 連装ロラン地对空ミサイル発射器 1 基を同諸島へ配備した。また空軍は 20 ミリメートル機関砲 8 門を配備した。その対空能力は、ほとんどが昼間好天時に目視で交戦する時に限られた<sup>21</sup>。

## 第 2 項 アルゼンチン軍の海上兵力

### a 全 般

アルゼンチン海軍(Armada Republica Argentina: ARA)のフォークランド戦争時の総数は、約 37,000 名で、そのうち約 6,000 名は海兵隊、また約 3,000 名は海軍航空隊の兵員であった。開戦時のアルゼンチン艦艇は、潜水艦 4 隻、航空母艦 1 隻、巡洋艦 1 隻、駆逐艦 7 隻、フリゲート艦 3 隻、警備艇 8 隻、その他各種艦艇を多数保有していた。アルゼンチン海軍の艦隊は、南アメリカの中では有力な海上兵力である。高いレベルの訓練とプロ意識を持って技術的に熟達することにより、比較的小規模の艦隊で、旧式の装備と指揮統制通信の欠陥を埋め合わせようとしていた。しかしイギリス海軍の進歩した戦術と新しい兵器システムの前には、敵うものではなかった。特にアルゼンチン海軍の主な問題は、イギリス海軍の攻撃型原子力潜水艦の脅威の下で、いかに艦隊を運用するかであった。しかしこの問題は実際に巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー(ARA General Belgrano)」が沈められてしまうと、対処法を全く持っていなかったアルゼンチンの艦隊は外洋への進出を止めた。またアルゼンチン水上艦隊は、航空攻撃にも脆弱だった。アルゼンチンはイギリス同様、空中早期警戒機を保有せず、空中の搜索は艦艇と地上のレーダーに頼るのみであるが、それらのレーダーも全般に能力が乏しかった<sup>22</sup>。

補給の面では、アルゼンチン海軍には大型タンカー 1 隻、小型タンカー 2 隻を保有するのみで、他に艦隊の補給艦を保有していなかった。民間の商船または海軍輸送船が必要であり、洋上での全般的な補給は困難で長期にわたる作戦には支障をきたすはずであった<sup>23</sup>。

### b 兵 器

#### (a) 潜水艦

潜水艦については、4 隻のうち 2 隻は、アメリカ海軍が第二次世界大戦中に完成したバラオ級(Balao class)のディーゼル潜水艦で、戦後に「ガッピー(Guppy)」改装を受けたものを 1971 年にアメリカから移籍されたものだった。この潜水艦の諸元は、排水量浮上時 1,870 トン、潜航時 2,420 トン、全長 93.7 メー

<sup>21</sup> Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 60-61; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 82.

<sup>22</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 92; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 75-76.

<sup>23</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 76.

トル、魚雷発射管 533 ミリメートルを前方 6 門、後方 4 門、最高速力水上 18 ノット、水中 15 ノット、乗員 84 名であった。2 隻のうち「サンタ・フェ(ARA Santa Fe)」が作戦に就ける状態だった。他の 1 隻の「サンチャゴ・デル・エステロ(ARA Santiago del Estero)」は、1981 年に実任務から離れマル・デル・プラタ(Mar del Plata) 潜水艦基地で静止教材として使われ、もはや潜航することができなくなっていた。1982 年 4 月後半にアルゼンチン海軍は、アメリカの偵察衛星による情報をイギリスが受けているだろうという予測から、「サンチャゴ・デル・エステロ」をマル・デル・プラタからプエルト・ベルグラノー(Puerto Belgrano)海軍基地に移動して隠した。この潜水艦が作戦に就いているとイギリスに思わせたかったからである<sup>24</sup>。

残り 2 隻の潜水艦もディーゼル潜水艦であり、西ドイツで設計された 209 型で、構成部分ごとにドイツで組み立てられ、アルゼンチンへ輸送され最終的に組立てられた。この潜水艦の諸元は、排水量浮上時 1,185 t、潜航時 1,285 トン、全長 55.9 メートル、魚雷発射管 533 ミリメートル前方 8 門、最高速力水上 10 ノット、水中 22 ノット、乗員 32 名であった。2 隻のうち「サルタ(ARA Salta)」は工場で修理の後、試験航海を行ったが騒音が過剰で作戦運用できる状態ではなく、最後まで作戦に就くことはなかった。もう 1 隻の「サン・ルイス(San Luis)」は、技術的には完全に運用可能な状態であったが、乗員は戦争直前に配員されたばかりであった<sup>25</sup>。

#### (b) 航空母艦

航空母艦については、「ベンチシンコ・デ・マジヨ(ARA Venticinco de Majo)」を保有していた。この航空母艦は、もともと航空母艦カラッサス級(Colossus class)に属する「ヴェナーブル(HMS Venerable)」として 1945 年 1 月にイギリス海軍へ就役していた。その後 1948 年 4 月オランダに売却され「カレル・ドーアマン(Hr. Ms. Karel Doorman)」と改称された。オランダで甲板をアングルド・デッキに、また蒸気式カタパルト 1 基を設置する改修が行われた。その後 1968 年 10 月にアルゼンチンに売却された<sup>26</sup>。

フォークランド戦争当時は、本艦に慣性航法参照システムと改善された着艦支援システムの搭載が未完のため、ダッソー・シュペル・エタンダール(Dassault Super Étendard)攻撃機の搭載は見送られた。シュペル・エタンダール以外の攻撃機は、スカイホーク(A-4Q)であり全天候戦闘能力を保持していなかった。そもそも本艦の原型は、イギリスが第二次世界大戦中に多数の航空母艦を急速に就役させる目的で建造されたため、艦形が小さく出力不足で水中防御がほとんど考慮されていなかった。低速のため満載のジェット攻撃機を発艦させるには、10 ノット以上の相対風速が必要であり、大能力のカタパルトや着艦拘束装置を装着できないなど基本設計に起因した問題は大きかった。また機関に問題を抱えており、設計どおりの出力を発揮できなかった。本艦の諸元は、排水量 19,896 トン (最大)、全長 211.3 メートル、最大出力 40,000

<sup>24</sup> *Jane's Fighting Ships 1980-81* (London: Jane's, 1980) p. 25; Robert L. Scheina, "Where Were Those Argentine Subs?" *United States Naval Institute Proceeding* (vol. 110, no. 3, Mar. 1984), pp. 115-117.

<sup>25</sup> *Jane's Fighting Ships 1980-81*, p. 25.

<sup>26</sup> Norman Friedman, *British Carrier Aviation: The Evolution of the Ship and Their Aircraft* (Annapolis, Naval Institute Press, 1988), pp. 230, 243, 362.

馬力、最大速度 24.5 ノット（実際は 20 ノット以下といわれる）、40 ミリメートル対空砲×7、標準搭載機数：固定翼機 18 機、回転翼機 7 機であった<sup>27</sup>。

#### (c) 巡洋艦

巡洋艦については、1 隻「ヘネラル・ベルグラノー」を保有していた。この巡洋艦は、もともとアメリカ海軍のブルックリン級(Brooklyn class)「フェニックス(USS Phoenix)」であり、1939 年に就役していた。アルゼンチン海軍は、本艦を 1951 年にアメリカから購入した。本艦の諸元は、満載排水量 13,645 トン、全長 185.4 メートル、兵装：6 インチ砲 15 門、5 インチ砲 8 門、2 連装 40 ミリメートル砲 2 門、艦対空ミサイル・シー・キャット(Seacat)4 連装発射器 2 基、装甲厚 38～203 ミリメートル、最高速度 32.5 ノット（新造時）、ヘリコプター 2 機搭載であった。旧式の軍艦であり、航空母艦「ベンチシンコ・デ・マジョ」同様機関に問題を抱えており、大きな脅威ではなかった<sup>28</sup>。

#### (d) 駆逐艦・フリゲート艦

駆逐艦については 4 種類 7 隻を保有し、そのうち最新のもの 2 隻は、イギリスで設計された 42 型駆逐艦である。「エルクレス (ARA Hercules)」はイギリスで製造され 1976 年にアルゼンチン海軍に就役した。もう 1 隻の「サンティシマ・トリニダー (ARA Santisima Trinidad)」は、イギリスの支援を受けアルゼンチンで製造され、1981 年に就役した。これらの艦については、その能力とアルゼンチンの直面している不具合をイギリスは十分掌握していた。反面イギリス海軍も同型艦をこの戦争に 6 隻投入しており、その防空システムの持つ欠点について、アルゼンチン海軍航空隊およびアルゼンチン空軍は十分掌握することができた。本級の諸元は、満載排水量 4,100 トン、全長 125 メートル、兵装：4.5 インチ砲 1 門、艦対艦エクゾセ・ミサイル(Exocet)発射機 4 基、艦対空ミサイル・シー・ダート(Sea Dart)連装発射器 1 基、20 ミリメートル機関砲 2 門、3 連装魚雷発射管 2 基、ヘリコプター 1 機搭載、最高速度 30 ノットであった。これら 2 艦は、4 月 2 日のフォークランド諸島上陸作戦と、4 月 30 日から 5 月 2 日にかけてのイギリス任務部隊を迎撃する作戦で使用された<sup>29</sup>。

他の 5 隻の駆逐艦は、いずれも第二次世界大戦中に建造されたアメリカ海軍の駆逐艦を購入したものである。フレッチャー級(Fletcher class)の「アルミランテ・ドメク・ガルシア(ARA Almirante Domecq Garcia)」はこの戦争で使用されなかった。アレン・M・サムナー級(Allen M. Sumner class)3 隻のうち、2 隻「イーポリート・ブーチャード(ARA Hipólito Bouchard)」、「ピエドラ・ブエナ(ARA Piedrabuena)」は 1960

<sup>27</sup> *Jane's Fighting Ships 1980-81*, p. 25; Friedman, *British Carrier Aviation*, pp. 227-233; A.D. Baker III, "Aircraft Carriers in the Falklands," *United States Naval Institute Proceeding* (vol. 110, no. 2, Feb. 1984), pp. 102-103. Robert L. Scheina, *Latin America: A Naval History 1810-1987* (Annapolis; Naval Institute Press, 1987), p. 250.

<sup>28</sup> *Jane's Fighting Ships 1980-81*, p. 26; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 75.

<sup>29</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-1983* (London; Jane's, 1982), pp. 10; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 75-76; Rodney A. Burden, Michel I. Draper, Douglas A. Rough, Colin R. Smith, David L. Wilton, *Falklands the Air War* (Dorset; Arms and Armour Press, 1986), p. 34; Scheina, *Latin America*, pp. 236, 248-253.



年代にアメリカ海軍で近代化改装を受けて、残り 1 隻「セグイ(ARA Segui)」は近代化改装を受けずにアルゼンチン海軍に引き取られた。両者の装備にはレーダーおよびソナーの型式、ヘリポートの有無などに相違がある。諸元は、満載排水量 3,320 t、全長 114.8 m、兵装：5 インチ連装砲 3 基、艦対艦エグゾセ・ミサイル発射器 4 基、3 連装魚雷発射管 2 基、最高速度 34 ノットであった。残りの 1 隻は、ギアリング型に 1960 年代アメリカ海軍が近代化改装を行った「コモドロ・ピー(ARA Comodoro Py)」であった。本艦の諸元は、満載排水量 3,500 トン、全長 119 メートル、兵装：5 インチ連装砲 3 基、艦対艦エグゾセ・ミサイル発射器 4 基、ヘッジホッグ（対潜水艦迫撃砲）発射器 2 基、3 連装魚雷発射管 2 基、ヘリコプター 1 機搭載、最高速度 32.5 ノットであった。「アルミランテ・ドメク・ガルシア」を除く 4 隻は、4 月 2 日のフォークランド諸島上陸作戦と、4 月 30 日から 5 月 2 日にかけてのイギリス任務部隊を迎撃する作戦で使用された<sup>30</sup>。

アルゼンチン海軍は、新しいフランス製フリゲート艦 A69 級 3 隻「ドゥルモンド(ARA Drummond)」、「グェリコ(ARA Guerrico)」、「グランビーリエ(ARA Granville)」を保有していた。本級の諸元は、満載排水量 1,170 トン、全長 80 メートル、兵装 3.9 インチ砲 1 門、20 mm 機関砲 2 門、艦対艦エグゾセ・ミサイル発射機 2 基、375 ミリメートル Mk. 54 ロケット発射器 1 基、対潜魚雷発射管 4 基、最高速度 24 ノットである。本型は、4 月 2 日のフォークランド上陸作戦に「ドゥルモンド」、「グランビーリエ」が、3 日のサウス・ジョージア島上陸には「グェリコ」が、4 月 30 日から 5 月 2 日にかけてのイギリス任務部隊を迎撃する作戦では全艦が使用された<sup>31</sup>。

### 第 3 項 アルゼンチン軍の航空兵力

#### a 全般

アルゼンチンは航空戦力を陸海空 3 軍それぞれが保有していた。またこの戦争ではアルゼンチン沿岸警備隊のヘリコプターもフォークランドに配備されていた。

#### (a) 空軍

アルゼンチン空軍(Fuerza Aérea Argentina: FAA)が最大の戦力を保有していた。フォークランド戦争当時、空軍は航空作戦集団(Comando de Operaciones Aéreas)、防空集団(Cmando Aéreo de Defensa)、航空軍管区集団(Comando de Regiones Aéreas)、補給集団(Comando de Material)および教育集団(Comando de Instruccion)の 5 つの任務集団に区分されていた。航空作戦集団は、他の任務集団の支援を受け、8 個の航空旅団(Brigada Aérea)を構成していた。防空集団は同様に 2 個航空旅団を構成していた。航空部隊の数としては練習部隊を含めて 23 個飛行中隊であった。その他に固定レーダーおよび移動レーダーによる航空警戒管制部隊と対空機関砲による防空部隊が存在する。また空軍がアルゼンチンの国営民間航空を運

<sup>30</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-1983*, pp. 11-12; Scheina, *Latin America*, pp. 236, 28-253.

<sup>31</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-1983*, pp. 12; Scheina, *Latin America*, pp. 236, 242, 243, 248-250.

航していることも忘れてはならない<sup>32</sup>。

フォークランド戦争開始前に保有していた兵力は、総員 19,000 名、航空機は、戦闘機・攻撃機・爆撃機を 169 機、各種輸送機を 89 機、各種ヘリコプターを 63 機、練習機その他を 152 機であった<sup>33</sup>。1969 年にアルゼンチンは 3 軍の分担を定め、国家に対する海上からの攻撃への対処は、全面的に海軍の担任事項となった。そのためこの戦争開始前に空軍は、海上戦闘（対艦攻撃、海上偵察等）に対する準備が何もなかった<sup>34</sup>。

#### (b) 海軍航空隊

アルゼンチン海軍航空隊(Comando de Aviación Naval de la Armada Argentina: CANA)は、総員約 3,000 名、6 個海軍航空艦隊(Escuadra Aéronaval)の下に 4 個攻撃中隊、1 個偵察中隊など計 12 個の飛行中隊から編成されていた。用途ごとの機数は、攻撃機 17 機、軽攻撃機 24 機、対潜哨戒機 6 機、輸送機 22 機、ヘリコプター 19 機、その他練習機を保有していた<sup>35</sup>。

#### (c) 陸軍航空隊

固定翼機としてアエリタリア(Aeritalia)G.222、エアロ・コマンダー (Aero Commander) など、合計 67 機を保有していた。回転翼機は、アグスタ(Agusta)A 109、ベル(Bell) 47、ボーイング・チヌーク(Boeing Chinook)などを保有していた。戦争当時、陸軍航空隊(Comando de Aviación de Ejército)は、2 個の飛行部隊から編成されていた。1 つは第 601 戦闘飛行大隊(Batallón de Aviación de Combate 601: CAB601)で、この部隊は陸軍のすべてのヘリコプターを運行していた。ヘリコプター以外の航空機は第 601 一般支援航空中隊(Compañía de Aviación de Apoyo General 601: CAAG601)に所属した。所有機数について、ヘリコプターは、大型から小型まで計 70 機保有し、固定翼機は、中小型輸送機各種を計 67 機保有していた。この戦争では、陸軍から 19 機のヘリコプターが投入された<sup>36</sup>。

#### (d) 航空基地

フォークランド戦争で航空作戦を考える場合、航空機の航続力と航空基地が問題となった。フォークランド東島にあるスタンレー飛行場は、滑走路長が 1,250 メートル (4,101 フィート)しかなく、ジェット戦闘機/攻撃機は、緊急離着陸場としてしか使えなかった。そもそもイギリスは、1972 年にスタンレー飛行場を造成する際に、最初は大型航空機も離着陸可能な長さにするつもりだったが、先見の明でこの長さに限定したのだった。アルゼンチン空軍にとって、この滑走路の延長と周辺に航空機整備補給施設、対空火

<sup>32</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 158-160.

<sup>33</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 92.

<sup>34</sup> René De La Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," Robin Higham and Stephen J. Harris ed., *Why Air Forces Fail: The Anatomy of Defeat* (Lexington: The University Press of Kentucky, 2006), p. 234.

<sup>35</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 156; *Military Balance 1981-1982*, pp. 92-93.

<sup>36</sup> English, *Armed Forces of Latin America*, p. 34; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 157-158.

器および掩体の速やかな建設は、どんな犠牲を払ってもやらなければいけないことであった。しかしアルゼンチン空軍は、これにたいし全く企図がなく、フォークランド諸島へイギリス潜水艦による封鎖の完了する前に、建設資材、土木工作機械および建設労働者を送ることはなかった<sup>37</sup>。結局アルゼンチン軍はスタンレー飛行場の駐機場を拡張したのみで、それですら輸送機の取り回しに危険を感じたほどであった。またアルゼンチン軍は、フォークランド諸島内でスタンレー飛行場の他にグース・グリーンとペブル島に航空基地を置き、軽攻撃機を配備したがそれらの滑走路は草地のままであった<sup>38</sup>。

では、フォークランド諸島に近い南アメリカ大陸パタゴニア地方の基地整備状況はどうであったろうか。確かにこの地方には幾つかの基地はあったが、どれ1つ戦争に対する準備ができていなかった。戦闘機・攻撃機の離着陸には滑走路が短すぎるもの、滑走路が十分長いものは、多数の航空機を運用するための、誘導路と駐機場がなかった。さらに継続的な航空作戦をするための格納庫、各種建物、その他必要な施設もなかった<sup>39</sup>。

パタゴニア地方には主要航空基地が3カ所にあった。リオ・ガリエゴス(Río Gallegos)基地は、フォークランド諸島東部から約790キロメートル(430海里)の距離にあり、滑走路長は3,540メートル(11,600フィート)であった。サン・フリアン(San Julián)基地は約700キロメートル(380海里)の距離にあり、滑走路長は1,980メートル(6,500フィート)であった。リオ・グランデ(Río Grande)基地からは、690キロメートル(370海里)の距離にあり、滑走路長は1,980メートル(6,500フィート)であった。最も近いリオ・グランデ基地は、ティエラ・デル・フエゴ(Tierra del Fuego)島にあり、この島の地形上さらに東へ約80キロメートルフォークランド諸島に近づけて滑走路を造ることもできただろう。しかし空軍はその手を取らなかった<sup>40</sup>。

## b 戦闘機

戦闘機で、主力をなすのは、フランス製ダッソー・ミラージュ IIIIA(Dassault Mirage IIIIA)であり、単発ジェット・エンジンのデルタ翼機であった。フランスの本機の製作意図は戦闘攻撃機であったが、アルゼンチン空軍は基本的に要撃戦闘機そして護衛戦闘機として使用した。フランスから10機を1972年購入し、他に複操縦型(複座型)のミラージュ IIIDAを2機購入した。また1980年にフランスから7機のミラージュ IIIIAの追加購入を行った。開戦時に本機は、複座型も含め17機あり、第8戦闘飛行群(Grupo 8 de Caza: G8C)が装備した。ミラージュの諸元について、レーダーはトムソン CFS(Thomson CFS)社のシラノ(Cyrano) IIで、空対空、空対地の両方式をもち、周波数帯はI/J帯(8-20 GHz)で、モノパルス方式、最大出力は200キロワットであった。空対空ミサイルについては、1972年に購入した機体は、旧式

<sup>37</sup> Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," p. 243.

<sup>38</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, p. 77; Jeffrey Ethell, Alfred Price, *Air War South Atlantic* (London: Sidgwick & Jackson, 1983), p. 31.

<sup>39</sup> Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," pp. 241-242.

<sup>40</sup> Pedraja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," p. 242. Pedrajaは、ティエラ・デル・フエゴ島内に200キロメートル近づけて滑走路ができるとしているが、地図で測ると80kmである。

のマトラ(MATRA) R530 (シーカーはセミ・アクティブ・レーダー・誘導(Semi-Active Radar Homing: SARH)と赤外線誘導(Infra-Red Homing: IRH)の両型がそれぞれある)のみが運用できた。1980年に購入した機体は、マトラ R530 とマトラ R550 (IRH 短距離ミサイル) が運用できた。固定火砲としては 30 ミリメートル機関砲 2 門を持つ。高高度ではシー・ハリヤーより高速であった。航続力は短く空中受油装置を装備していなかった。1700 リットル増装タンク 2 本と R530 を 1 発あるいは R550 を 2 発搭載して、リオ・ガリエゴス基地からポートスタンレー (距離約 430 海里) まで飛び、そこで 15 分程度哨戒したら帰還しなければならなかった<sup>41</sup>。

### c 攻撃機

アルゼンチンのもう 1 つの戦闘攻撃機ダガー(Dagger)は、ミラージュ III の派生型ミラージュ V をイスラエルの IAI 社がライセンスなしで生産し、アルゼンチンが輸入したものである。ミラージュ III から多くのアビオニクス (レーダー、ECM、ESM、INS) を取り外し、その分を攻撃兵器の搭載にふりむけたもので、全天候性能はない。アルゼンチンは、1978 年から総計 39 機を輸入し、そのうち 4 機は複座型であった。フォークランド戦争前に事故により 2 機を失っていた。ダガーについては第 6 戦闘飛行群 (Grupo 6 de Caza: G6C) が装備した。空対空ミサイルは、赤外線誘導方式に限られ、イスラエル製のシャフリル (Shafir) を搭載したが、アビオニクスの欠如もあり、目視しながら手動操作により発射手順を行わなければならない、使い物にならなかった。30 ミリメートル機関砲 2 門は強力な破壊力を持っていたが、搭載弾数は少なく 1 射撃か 2 射撃で弾がなくなった。良い点としては、機体が頑丈なこととマーチン・ベーカー (Martin Baker) 射出座席の信頼性が高かったことであった<sup>42</sup>。

また前述の戦闘機ミラージュ III およびこのダガーには空中受油装置が装備されておらず、空中給油を受けることが不能で、また戦争間にその装置を付加することもなかった。イギリスが、ニムロッド上哨戒機およびハーキュリーズ(Hercules)輸送機に対し、開戦後急遽空中受油装置を装備したことと対照的であった。これはアルゼンチンに、空中受油装置を付ける意図が起きなかったのか、工業的に装備する技術がなかったのか不明である<sup>43</sup>。

アルゼンチン空軍および海軍航空隊の攻撃機の主力はダグラス(Douglas) A-4B/C/Q スカイホーク (Skyhawk) であった。本機はアメリカ海軍の艦上攻撃機として 1954 年に初飛行したもので、単発ジェット・エンジンでデルタ翼機の小型の機体であった。アルゼンチン空軍は 1960 年代から 70 年代にかけて、アメリカが余剰機を精密分解検査した A-4B/C を 68 機購入していた。B 型は全くの昼間戦闘用であって、C 型は B 型にハードポイントを増設し航法・攻撃システムを更新したものだ。アルゼンチンは、70 年代後半よりアメリカから武器輸出禁止を受けており、本機も部品の不足から稼働機の減少や、一部シス

<sup>41</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 144-147; Doug Richardson, "Military Airborne Radars," *Flight International* (No. 3655, 7 April 1979), p. 1070.

<sup>42</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, p. 129.

<sup>43</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 76-82, 129, 144, 402, 403, 407;

テム非稼働のまま使用していた。また B 型と C 型を比較すると、戦果は B 型の方が多く、損失は C 型の方が多かった。したがって C 型の航法・攻撃システムもどれくらい稼働し戦闘遂行に寄与したかは疑問である。B/C 型合わせて 40 機程度がこの戦争に使用され、B 型は第 5 戦闘飛行群 (Grupo 5 de Caza: G5C) が装備し、C 型は第 4 戦闘飛行群 (Grupo 4 de Caza: G4C) が装備した。Q 型はアルゼンチン海軍が使用し、この型も 1970 年代初頭にアメリカが B 型を精密分解検査したものを 16 機購入したものである。やはりアメリカの武器禁輸で、稼働率が低かった。戦争当時航空母艦「ベンチシンコ・デ・マジヨ」でのシュペル・エタンダールの運用が制限されていたので、本機が攻撃機として航空母艦から離着艦できる唯一のものだった。Q 型は海軍第 3 戦闘攻撃飛行隊(3 Escuadrilla de Caza y Ataque)が装備した<sup>44</sup>。

海軍航空隊はスカイホーク(A-4Q)の後継攻撃機としてフランス製ダッソー・シュペル・エタンダールを 5 機および本機の主要兵装である空対艦エグゾセ・ミサイルを 5 発、この戦争の開戦時に保有していた。本機は単発ジェット・エンジンの後退翼機であった。アルゼンチンは、本機を合計 14 機発注していたが、戦争開始によりフランスが武器輸出を禁止したため 5 機のみとなった。疑いなく本機とエグゾセ・ミサイルの組み合わせは、イギリス任務部隊にとって最も警戒すべきアルゼンチンのウェポン・システムだった。本機は海軍第 2 戦闘攻撃飛行隊(2 Esuadrilla de Caza y Ataque)が装備した<sup>45</sup>。

#### d 爆撃機

爆撃機としては、イギリスで 1949 年に初飛行したイングリッシュ・エレクトリック・キャンベラ(English Electric Canberra)を 10 機保有していた。双発ジェット・エンジンの直線翼機で、すべての面で現代戦には通用せず、唯一の利点は航続力が長いことだった。本機は第 2 爆撃飛行群(Grupo 1 de Bombardeo: G2B)が装備した<sup>46</sup>。

#### e 軽攻撃機

空軍は軽攻撃機としては、コイン(COIN: Counter-Insurgency)機としてアルゼンチン国産の IA-58 プカラ(Pucar )攻撃機を保有していた。ターボプロップ双発機なので航空優勢を確保していなければ運用は難しかった。この戦争開始時には 35 機を装備しており、第 3 攻撃飛行群(Grupo 3 de Ataque: G3A)が装備した。イギリスが反攻する前に、フォークランド東島に 26 機配備された<sup>47</sup>。

他にも海軍航空隊は、軽攻撃機としてイタリア製のアエルマッキ(Aermacchi) MB-339A を所有していた。海軍航空隊に本機は 1980・81 年に海軍第 1 攻撃飛行隊(1 Escuadrilla de Ataque)へ配備が始まったばかりで、この戦争開始時にまだ運用試験を実施している最中であつた。それでもフォークランド東島へ 6 機

<sup>44</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 38, 110, 116; Salvador Maf  Huertas and Jesus Romero Braiasco, *Argentine Air Forces in the Falklands Conflict* (Poole, Dorset, UK: Arms and Armour Press, 1987), pp. 16, 20, 47.

<sup>45</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, p. 34; Chris Hobson with Andrew Noble, *Falklands Air War* (Hinckley; Midland, 2002), p.166.

<sup>46</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, p. 90.

<sup>47</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 95-97.

が配備された。またもう1つ海軍が用いた軽攻撃機はアメリカ製ビーチクラフト(Beechcraft) T-34C メンター(Mentor)であり、海軍第4攻撃飛行隊(4 Escuadrilla de Ataque)の4機がフォークランド西島の北にある小島ペブル(Pebble)島に配置された。攻撃機といっても、前者は中等練習機、後者は初等練習機を改造したものであり、航空優勢下でなければ作戦できない性能だった<sup>48</sup>。

#### f 偵察機

アルゼンチン軍は、偵察任務に特化した機種を保有していなかった。戦争が始まると、急遽輸送機である空軍所属のアメリカ製ロッキード(Lockheed) C-130 エルクレス(Hercules)およびアメリカ製ボーイング(Boeing) 707 に、南大西洋のイギリス任務部隊捜索等の偵察任務を行わせた。目視による偵察か手持ちカメラによる写真撮影のほか、ボーイング 707 にはイスラエル製の電子信号情報(Signal Intelligence: SIGINT)偵察装置が装備されていた。また空軍は航空写真撮影と地図作成のために、カメラ装備を施したビジネス・ジェット機のアメリカ製ゲイツ・リアジェット(Gates Learjet)35A を4機保有していた。このリアジェットは、慣性航法装置とオメガ(Omega)航法装置を装備しており、また高高度を比較的高速で飛行することができた。これらの特徴からリアジェットは、この戦争で写真偵察機や攻撃目標までの誘導機として使われた<sup>49</sup>。

#### g 哨戒機

空軍は空中早期警戒機を保有しておらず、水平線越えの電子的警戒監視を行うことができなかった。海軍航空隊は、長距離哨戒機としてアメリカ製ロッキード SP-2H ネプチューン(Neptune)を2機、短距離哨戒機としてアメリカ製グラマン(Grumman) S-2E トラッカー(Trucker)を6機使用した。SP-2H は、機体寿命の限界に近づいており、戦争中に幾度か哨戒任務を行った後、5月15日に退役した<sup>50</sup>。両機種の対潜水艦哨戒用電子機器は1960年中期のもので、1982年にイギリス潜水艦に対するには性能的に厳しいものがあつた<sup>51</sup>。

#### h 輸送機・空中給油機

開戦時に空軍は、4発ジェット旅客機ボーイング 707 を3機、4発ターボプロップ輸送機ロッキード C-130E/H を7機、オランダ製短距離双発ジェット旅客機フォッカー(Fokker)F-28 を5機、オランダ製双発ターボプロップ旅客機フォッカーF-27 を11機保有していた。また海軍航空隊は、アメリカ製4発ターボプロップ旅客機ロッキード・エレクトラ(Electra)を3機、フォッカーF-28 を3機保有していた。これらの航空機および民間の旅客機を動員して、外国とアルゼンチン、アルゼンチン国内ならびにアルゼンチン

<sup>48</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 29, 45.

<sup>49</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 76-89; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 221.

<sup>50</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 47, 49.

<sup>51</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 78.

本土とフォークランド諸島の航空輸送を行った。ただしボーイング 707 は滑走路長の関係でスタンレー空港に着陸できなかった。4月30日からはイギリス任務部隊の接近により危険が高まったため、アルゼンチン本土とスタンレー空港間の輸送飛行は、空軍の C-130 と海軍のエレクトラ、F-28 に限られた。戦局に大きな影響を与えたわけではないが、これらは航空優勢を失っていくなかで、戦争の最後の日までフォークランド東島とアルゼンチン本土との連絡を保ち続けた<sup>52</sup>。

航続力延伸のために空中給油機の使用は有効な解決手段であり、アルゼンチン空軍は空中給油機 KC-130 H を 2 機保有していた。この 2 機は、戦争中に空軍機および海軍機に空中給油を行い、それなりの成果を挙げた。しかし、しよせん 2 機では、例えばフォークランド諸島周辺に大攻撃部隊を送りこみ、イギリス任務部隊の防空能力を飽和させることなどはできなかった<sup>53</sup>。

#### j ヘリコプター

アルゼンチン海軍はイギリス製ウェストランド・リンクス(Westland Lynx)を 2 機、フランス製エアロスペシャル(Aérospatiale) SA3160 アルエット(Alouette)III を 9 機ほど、アメリカ製シコルスキー(Sikorsky) S-61D-4 シー・キング(Sea King)を 5 機保有していた。これらのうちでアルエット 1 機は、4月3日のアルゼンチンのサウス・ジョージア侵攻作戦に、シー・キング 3 機は 4月2日のフォークランド諸島侵攻作戦にそれぞれ兵員を降着させるのに使われた。その後これらヘリコプターのうち何機かは、アルゼンチン海軍任務部隊の艦艇に搭載された。しかしその後、アルゼンチン艦艇は港にこもってしまったため、作戦実施の機会はなかった。シー・キング 1 機がフォークランド西島の北にあるペブル島へ救出作戦を 1 回行った程度のものである<sup>54</sup>。

アルゼンチン陸軍は、前述のようにヘリコプターを 70 機ほど保有していた。そのうちこの戦争に投入されたのは、フランス製エアロスペシャル SA330L ピュマ(Puma)を 7 機、イタリア製アグスタ(Agusta) A-109A を 3 機、アメリカ製ベル(Bell) UH-1H イロコイ(Iroquois)を 9 機、アメリカ製ボーイング・ヴァートル(Boeing Vertol) CH-47C チヌーク(Chinook)を 2 機であった<sup>55</sup>。

アルゼンチン沿岸警備隊(Prefectura Naval Argentino)は、4月2日のフォークランド諸島主権回復により、その沿岸を警備するため、エアロスペシャル SA330L ピュマ・ヘリコプター 1 機を派遣した。しかし 5月3・4日夜のイギリス海軍艦艇の砲撃により破壊された<sup>56</sup>。

アルゼンチン軍がフォークランド諸島へ配備できたヘリコプターは 26 機のみであった。戦車、装甲兵員輸送車等がなく、道路もほとんどなく泥炭地か岩石地帯の広がる地勢では、ヘリコプターのみが陸上部隊の機動力を保証した。イギリスがこの戦争で、170 機以上のヘリコプターを動員し、それでもまだ足りなかったことを考えると、アルゼンチンの陸上部隊が機動戦を行える可能性はなかった。またヘリコプタ

<sup>52</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 52, 76-86, 148-149. Hobson, *Falklands Air War*, pp. 184-188.

<sup>53</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 76-82.

<sup>54</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 53-58.

<sup>55</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 63-75; Hobson, *Falklands Air War*, pp. 185-186.

<sup>56</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 59-61.

一を増勢したとしても、装甲車両同様それに対応する大量の燃料備蓄と整備補給を行わなければいけないが、イギリス軍の封鎖下では、できないことであった<sup>57</sup>。

#### k フォークランド諸島における航空警戒管制

アルゼンチンは、フォークランド諸島へ対空警戒管制用としてアメリカ製の AN/TPS-43 と AN/TPS-44 移動レーダーを各 1 台配備した。前者のレーダーを運用した部隊は、第 2 警戒監視群マルビナス中隊(Grupo 2 de Vigilancia y Control Escuadron Malvinas: G2VYCA Escuadron Malvinas)であった。AN/TPS-43 はフォークランド諸島侵攻の初日 1982 年 4 月 2 日に、フォークランド東島へ C-130 で空輸された。これらのレーダーは、よく機能し自軍の輸送機や攻撃機ヘシー・ハリアーの接近を警告した。またシー・ハリアーの接近・帰投経路や上昇・下降海域から、大体のイギリス空母戦闘群の位置を推定し、自軍攻撃機部隊へ通報した。イギリス軍の対レーダー・ミサイル AGM-45 による攻撃からも、操作手の気転でよく生き残った<sup>58</sup>。

AN/TPS-43 は 3 次元レーダーでありその諸元は、周波数 2.9~3.1 ギガヘルツ (波長 9.7~10.3 センチメートル) の間で 16 個の個別の周波数 (パルスごとに変更可能)、最大出力 4 メガワット、平均出力 6.7 キロワット、パルス継続時間 6.5 マイクロ秒、探知距離: 戦闘攻撃機を 408 キロメートルで探知、しかし水平線越えの探知能力はなく、海面高度で接近する航空機の探知距離は 26 カイリ (約 48 キロメートル)、高度 500 メートルで 35 カイリ (約 65 キロメートル) であった<sup>59</sup>。

AN/TPS-44 は戦術監視レーダーでありアルゼンチン陸軍の対空部隊が運用した周波数 1.25~1.35 ギガヘルツ (波長 22~24 センチメートル) 連続の変更可能、ピーク出力 1 メガワット以上、平均出力 1.12 キロワット、パルス繰返し周波数 800、533、400、267 の手動選択、距離精度 0.1 海里、水平角±1 度であった<sup>60</sup>。

### 第 2 節 イギリス軍

正式には、“the Armed Forces of the Crown”であり、一般的には“British Armed Forces”と呼称される。“His/Her Majesty's Armed Forces”呼称される場合もある。

イギリス軍の最高指揮官はイギリスの君主であるエリザベス II 世であるが、首相が実質的に指揮をすることになり、軍の全般の全般は国防省の国防委員会が担当している。イギリス軍は、一般的な陸海空軍の 3 軍種に加え海兵隊を有している。イギリスは、核不拡散防止条約(Treaty on the Non-Proliferation of

<sup>57</sup> Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 62, 64; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 83.

<sup>58</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 76, 162; Anthony H. Cordesman, Abraham R. Wagner, Ch. 3, “The Falklands War,” *The Lessons of Modern War*, vol. III (Boulder, CO; Westview Press, 1991), pp. 278-279; La Pedraja, “The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982,” pp. 247-248.

<sup>59</sup> *Jane's Weapon Systems 1980-1981* (London; Jane's, 1980), pp. 482-483; Cordesman, Wagner, “The Falklands War,” p. 279.

<sup>60</sup> *Jane's Weapon Systems 1980-1981*, p. 483.



Nuclear Weapons : NPT) で正式に認められた核兵器保有国である。徴兵制度は、第一次世界大戦および第二次世界大戦中から 1960 年までのみであり、この戦争のときも志願兵制度をとっていた。

イギリスは第二次世界大戦を戦勝国、5 大列強の 1 つとして生き残った。しかし戦後は、民族自決の世界的潮流を受け、大英帝国の植民地は次々と独立していった。またイギリス経済は大戦後長期間にわたり不振であり、帝国版図の縮小とあいまって軍備はたびたびの削減が行われた。かつては日の沈まぬ帝国として世界中に軍事力を展開していたイギリスも、1970 年代後半には、ヨーロッパ大陸、地中海および東大西洋を主戦場と定めた。それ以外の地域への軍事力行使は、保有する兵器で可能な範囲のものに限られた。しかしイギリスの軍隊は、朝鮮戦争、植民地独立の際の多くの紛争および北アイルランド紛争など多くの戦争・紛争に参加した。イギリス軍はこれらを通じて、第二次世界大戦後からフォークランド戦争までの間、ほとんど絶えることなく実戦の経験を積んでいたのであった。

フォークランド戦争時のイギリス国防軍の規模は、1981 年の軍事予算で比較すると世界で第 6 番目であり (アルゼンチンは 24 番目)、アルゼンチンの軍事予算と比較すると約 9 倍であった<sup>61</sup>。しかしフォークランド諸島は、イギリスから遠く離れた戦場であり、持てる兵力を全部集中することはできなかった。

#### 第 1 項 イギリス軍の陸上兵力

この戦争当時、イギリス陸軍は約 176,000 名、海軍の隷下に海兵隊(Royal Marines)は 7,900 名の現役兵力を保持し、その他に陸軍予備兵力 137,000 名と国防義勇軍(Territorial Army)69,500 名が存在した<sup>62</sup>。すでにイギリス軍は徴兵制を廃止し、最新の兵器を装備した全員志願兵からなる少数精鋭の部隊作りを目指していた。

陸軍は 1 個軍団、4 個装甲師団、1 個砲兵師団からなる。より小さな編成単位でみると、11 個装甲連隊、8 個装甲偵察連隊、48 個歩兵大隊、5 個グルカ(Gurkha)歩兵大隊、3 個空挺大隊、1 個特殊空挺連隊(Special Air Service; SAS)、1 個ミサイル連隊 (ランス(MGM-52 Lance)地对地短射程ミサイル装備)、3 個対空連隊 (レピア(Rapier)地对空ミサイル装備)、18 個砲兵連隊、11 個工兵連隊および 6 個陸軍航空連隊から構成されていた<sup>63</sup>。

陸軍の兵器として戦車・装甲車は、チーフテン(Chieftain)中戦車 900 両、スコープオン(Scorpion)軽戦車 271 両、サラディン(Saladin)装甲車 290 両、各種偵察装甲車 1,919 両および各種装甲兵員輸送車 2,998 両を保有していた。火砲については、105 ミリメートルから 155 ミリメートルまでの牽引火砲を 193 門および 105 ミリメートルから 203 ミリメートルまでの自走火砲を 243 門保有していた。対戦車火器としてはカール・グスタフ(Carl Gustav)84 ミリメートル対戦車ロケット砲、120 ミリメートル無反動砲、ミラン(Milan)およびスウィングファイア(Swingfire)対戦車誘導・ミサイルを装備していた。対空兵器としては、個人携行対空ミサイルとしてブローパイプ(Blowpipe)、部隊防空用としてレピア(Rapier)地对空ミサイル

<sup>61</sup> SIPRI, *World Armaments and Disarmament SIPRI Yearbook 1982*, pp. 140-145.

<sup>62</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 28.

<sup>63</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 28.

を装備していた<sup>64</sup>。

イギリスの陸軍の兵力配備は、北アイルランド(Northern Ireland)には、3個歩兵旅団、1個装甲偵察連隊を中心とする部隊約9,100名が、イギリス本土には10個現役兵大隊と6個国防義勇軍大隊を中心とする部隊が配置されていた。海外領土等へも配置されており、その中で最大のものは、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)に派遣されていた部隊であった。その内訳は4個機甲師団、1個砲兵師団等から編成され約58,000名に達していた<sup>65</sup>。

海兵隊の編成は3個コマンド大隊からなる1個コマンド旅団と3個特殊舟艇中隊(Special Boat Squadron: SBS)で編成されていた<sup>66</sup>。

イギリスは、これらの中から、陸軍・海兵隊合わせて約9,500名の陸上兵力をフォークランド戦争へ派遣した<sup>67</sup>。野戦火砲ではL118軽砲(L118 Light Gun : 105ミリメートル榴弾砲)を5個中隊、戦車・装甲車ではスコーピオンおよびシミター軽戦車合わせて8両、対戦車兵器としてミラン対戦車ミサイル、対空兵器としてレピアおよびブローパイプ地対空ミサイルをこの戦争で使用した。

## 第2項 イギリス軍の海上兵力

### a 全般

この戦争の前年の1981年に、イギリスの国防方針は大きく見直された。通常兵器を用いた海上戦力の位置づけは4番目となり、(戦略核抑止、イギリス本土の防空、西ドイツに駐留するイギリス陸空軍によるNATOへの寄与の次)イギリス海軍の主戦場は東大西洋になった。海上兵力への航空支援は、陸上を基地とする哨戒機により有効に行えると見なされ、航空母艦は短距離離陸垂直着陸機(Short Take Off Vertical Landing: STOVL)かヘリコプターのみ運用可能な航空母艦2隻を維持することになった。強襲揚陸艦2隻を保有していたが、1984年までには両方とも退役させる予定であった。海軍兵力は大きく削減される予定だった<sup>68</sup>。

この時期のイギリス海軍は、総員約74,700名(海軍航空隊、海兵隊を含む)、主力艦艇74隻、その総排水量245,000トンであった<sup>69</sup>。その主力艦艇でこの戦争に投入されたのは、33隻であった。また補助艦艇はイギリス艦隊補助部隊(Royal Fleet Auxiliary: RFA)のタンカーおよび補給艦等ならびにイギリス海軍

<sup>64</sup> *Military Balance 1981-1982*, pp. 28-29.

<sup>65</sup> *Military Balance 1981-1982*, pp. 28-29.

<sup>66</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 28.

<sup>67</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 211, 216. ただしフィールドハウス卿は、フォークランド派遣イギリス軍陸上兵力の総計を10,500名としている(Ministry of Defence, "The Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," *The London Gazette* (no. 49149, 13 December 1982), p. 16144.)

<sup>68</sup> John E. Woods, "The Royal Navy Since World War II," *U.S. Naval Institute Proceedings* (vol. 108, no.3, March 1982), pp. 89-90; Eric J. Grove, *Vanguard to Trident: British Naval Policy since World War II* (Annapolis: Naval Institute Press, 1987), pp. 342-355.

<sup>69</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 28; Grove, *Vanguard to Trident*, pp. 404, 406.

の保有する補給艦等に RFA の乗員が乗組んだものがあり、計 22 隻が戦争へ投入された。またイギリスは 48 隻の商船を徴用し、軍事輸送に適合するよう改造したうえ、これを兵員の輸送、物資の補給等に大いに役立てた<sup>70</sup>。イギリスがこの 2 カ月半にわたる戦争を圧倒的優位で進めることができたのは、これら支援艦艇によって兵員、燃料、食料、水、弾薬、各種兵器、予備品等を十分に補給できたことが一因だろう。

## b 海軍艦艇

### (a) 潜水艦

イギリスは戦争当時 11 隻の攻撃型原子力潜水艦(SSN)を保有し、そのうち 5 隻を戦争へ投入した。ディーゼル潜水艦は、保有 16 隻のうち 1 隻を使用した。クラスでいうと、原子力推進はバリエント級(Valiant class)を「バリエント(HMS Valiant)」の 1 隻、バリエント改級(Improved Valiant class)を「コンカラー(HMS Conqueror)」と「カレージアス(HMS Courageous)」の 2 隻、スィフチュア級(Swiftsure class)を「スパルタン(HMS Spartan)」と「スプレンドイド(HMS Splendid)」の 2 隻であった。ディーゼル推進は、オバロン級(Oberon class)の「オニクス(HMS Onyx)」1 隻であった<sup>71</sup>。

バリエント級およびバリエント改級は 1960 年代後半から 1970 年代初頭にかけて就役し、バリエント級の諸元は、潜航時排水量 4,900 トン、全長 86.9 メートル、蒸気タービン出力 15,000 軸馬力、最高水中速力 28 ノット、533 ミリメートル魚雷発射管 6 基、魚雷搭載数 26 発、乗員定員 103 名であった。スィフチュア級は 1970 年代から 1980 年代初頭にかけて就役し、その諸元は、潜航時排水量 4,500 トン、全長 82.9 メートル、蒸気タービン出力 15,000 軸馬力、ディーゼル補助エンジン 4,000 馬力、最高水中速力 30 ノット、533 ミリメートル魚雷発射管 5 基、魚雷搭載数 20 発、乗員定員 97 名である。オバロン級は 1960 年代に就役し、諸元は、潜航時排水量 2,410 トン、全長 90 メートル、ディーゼル・エンジン 3,680 馬力×2 基、電動モーター 3,000 馬力×2 基、最高速度：水上 12 ノット、水中 17 ノット、533 ミリメートル魚雷発射管：前方 6 基、後方 2 基、魚雷搭載数 24 発、定員 69 名であった<sup>72</sup>。

### (b) 航空母艦

この戦争はイギリスから見ると、イギリス本土から 13,000 キロメートル、前進基地となったアセンション島から 6,000 キロメートルも離れている戦域であった。アセンション島を離陸して、何回も空中給油を行い、大型の爆撃機、哨戒機、輸送機などはフォークランド諸島へ実際到達できた。しかし任務部隊への継続した防空態勢の提供と、陸上戦闘における航空優勢の確保および密接な航空支援を考えると、航空母艦なしでは作戦は成立しなかった。

<sup>70</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 28; David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War* (London, Guild Publishing, 1987), pp. 358-360; Roger Villar, *Merchant Ships at War: The Falklands Experience* (Annapolis; Naval Institute Press, 1984), pp. 169-170.

<sup>71</sup> Burden *et al*, *Falklands the Air War*, pp. 430-435.

<sup>72</sup> *Jane's Fighting Ships 1980-81*, pp. 550-552.

イギリスは、1978年12月に通常離着艦(Conventional Take Off and Landing: CTOL)航空機運用能力を持つ最後の航空母艦「アーク・ロイヤル(HMS Ark Royal)」を退役させ<sup>73</sup>、STOVL機とヘリコプターのみを運用できる航空母艦が残った。この戦争の開戦時にイギリスの保有していた航空母艦は、ハーミーズ級(Hermes class)の1番艦「ハーミーズ(HMS Hermes)」と、インヴィンシブル級(Invincible class)1番艦「インヴィンシブル(HMS Invincible)」の2隻であった。この航空母艦2隻というのは、フォークランド奪回作戦を成立させる最低限の数であった<sup>74</sup>。1隻でも航空母艦を失えば作戦は失敗であった。

これらの航空母艦の他にも1981年3月に予備役艦になり、処分予定のハーミーズ級対潜航空母艦「ブルワーク(HMS Bulwark)」が、この戦争開戦時まだ港に係留されていた。イギリス海軍は現役に復帰できるか調査したが、本艦は1980年11月に大火災を起こしており艦内の状況は悪く、復旧は断念された<sup>75</sup>。また1982年9月に完成予定、就役は1983年中旬をめざしていたインヴィンシブル級2番艦「イラストリアス(HMS Illustrious)」があり、完成を急がせたが、就役は1982年6月20日であり戦争に間に合わなかった<sup>76</sup>。

「ハーミーズ」は、1959年完成当時はCTOL航空機を運用する航空母艦として完成した。しかしこの戦争当時には上陸作戦支援能力も持つ対潜航空母艦に改修され、CTOL航空機を運用する能力を失っていた。1981年にはシー・ハリアーの運用能力を向上するため「スキー・ジャンプ台」が付加された。「ハーミーズ」は1983年には「イラストリアス」の就役と入れ替えに退役し廃艦予定であった。「ハーミーズ」の戦争時の諸元は、満載排水量28,700トン、全長226.9メートル、装甲厚：飛行甲板約19ミリメートル、弾薬庫・機関室約25～50ミリメートル、機関出力76,000軸馬力、最高速度28ノット、シー・キャット艦対空ミサイル4連装発射器2基、レーダー：監視タイプ965、捜索タイプ993、航法1006、火器管制GWS22×2基、ソナー：タイプ184、乗員定員1,350名であった。搭載機数は、平時にはシー・ハリアー5機とシー・キング対潜ヘリコプター12機が定数であったが、この戦争では最大、シー・ハリアー15機、ハリアー6機、シー・キング対潜ヘリコプター9機およびシー・キング輸送ヘリコプター4機を搭載した<sup>77</sup>。

「インヴィンシブル」は対潜戦(Anti-Submarine Warfare; ASW)巡洋艦として構想が生じたもので、のちに全通甲板でシー・ハリアーも運用できるASW航空母艦へ計画が変更された。イギリス海軍への就役は1980年7月であったが、イギリスの国防政策見直しで、1982年2月にオーストラリア海軍へ売却される契約が締結された。それがこの戦争の開戦により、イギリスとオーストラリア両政府の合意で契約は解消された。「インヴィンシブル」の諸元は、排水量(満載)19,500トン、全長206.6メートル、機関出力112,000

<sup>73</sup> Grove, *Vanguard to Trident*, p. 338.

<sup>74</sup> Stephen Badsey, "The Falklands War: Politics and Strategy," a Staff Seminar held at the National Institute for Defense Studies, Japanese Ministry of Defense (15 November 2011, Tokyo).

<sup>75</sup> Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 58, 449; Fleet Air Arm Archive, "HMS Bulwark Fleet Carrier/Comando Carrier," *Fleet Air Arm Archive 1939-1945* (no place, the article last modified 21 September 2001) < <http://www.fleetairarmarchive.net/Ships/Bulwark.html> >, accessed on 25 November 2011.

<sup>76</sup> Paul Beaver, *Modern Combat Ships 2: 'Invincible' Class* (Runnymede; Ian Allan, 1984), pp. 79-80.

<sup>77</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, p. 549; Baker III, "Aircraft Carriers in the Falklands," p. 103.

軸馬力、最高速度 28 ノット、シー・ダート艦対空ミサイル 2 連装、レーダーは監視用が 1022 型、捜索用が 992R 型、火器管制シー・ダート用は 909 型 2 基、航法用は 1006 型 2 基、ソナー用は 2016 型、定員 1,000 名であった。搭載機数は平時はシー・ハリヤー 5 機、シー・キング対潜ヘリコプター 9 機が定数であったが、この戦争で最大、シー・ハリヤー 10 機、シー・キング 11 機、リンクス・ヘリコプター 1 機を搭載した<sup>78</sup>。

### (c) ミサイル駆逐艦

6000 トン以上のミサイル駆逐艦は、82 型(Type 82 class)の「ブリストル(HMS Bristol)」とカウンティ級(County class)の「アントリム(HMS Antrim)」および「グラモーガン(HMS Glamorgan)」合計 3 隻が、この戦争で使用された。「ブリストル」は 1973 年 3 月に就役し、その諸元は、排水量 (満載) 7,100 トン、全長 154.5 メートル、機関総出力 60,000 軸馬力、最高速度 28 ノット、シー・ダート艦対空ミサイル 2 連装 1 基、114 ミリメートル砲 1 門、ヘリコプター離着艦母体×1、レーダーは監視用が 965 型、捜索用が 992Q 型、火器管制用は 909 型を 2 基、航法用は 1006 型、ソナーは 162 型、170 型、182 型、184 型、185 型、189 型、定員 407 名であった<sup>79</sup>。

カウンティ級は、1966 年から 1970 年の間に就役し、その諸元は、満載排水量 6,200 トン、全長 158.7 メートル、機関出力合計 60,000 軸馬力、最高速度 30 ノット、艦対艦エクゾセ・ミサイル 4 基、シー・スラグ艦対空ミサイル 2 連装発射器、シー・キャット艦対空ミサイル 4 連装発射器 2 基、114 ミリメートル 2 連装砲 2 基、20 ミリメートル機関砲 2 門、搭載ヘリコプター：ウェセックス 1 機、レーダー：対空捜索用 965M 型、監視用は 992M 型、測高用は 278M 型、シー・スラグ火器管制用はあ 901 型、砲火器管制用は MRS3 型、シー・キャット火器管制用 GWS22 型、航法用 978 型または 1006 型、ソナーは 176 型、177 型、182 型、192 型、定員 472 名であった<sup>80</sup>。

4,000 トン以下のミサイル駆逐艦は、22 型(Type 22 class)の「ブロードソード(HMS Broadsword)」、「ブリリアント(HMS Brilliant)」2 隻と、42 型(Type 42 class)の「シェフィールド(HMS Sheffield)」、「グラスゴー(HMS Glasgow)」、「エグゼータ(HMS Exeter)」、「カージフ(HMS Cardiff)」、「コヴェントリー(HMS Coventry)」5 隻、合計 7 隻がこの戦争で使用された。

22 型は、1979 年から 1990 年にかけて 14 隻がイギリス海軍へ就役し、フォークランド戦争では最新鋭のミサイル駆逐艦であった。当時 22 型の諸元は、満載排水量 4,000 トン、全長 131.2 メートル、機関出力合計 56,000 軸馬力、最高速度 30 ノット、武装：艦対艦エクゾセ・ミサイル 4 基、シー・ウルフ艦対空ミサイル 6 連装発射器 2 基、40 ミリメートル機関砲 2 門、Mk.32 対潜魚雷 3 連装発射管 2 基、搭載機リンクス・ヘリコプター 2 機、レーダーは捜索用が 967 型、968 型各 1 基、シー・ウルフ火器管制用は 910

<sup>78</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 543, 550; Beaver, *Modern Combat Ships 2*, pp. 85-86; Baker III, "Aircraft Carriers in the Falklands," p. 104; Badsey, "The Falklands War: Politics and Strategy."

<sup>79</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 551.

<sup>80</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 551.

型 2 基、航法用は 1006 型、ソナーは 2016 型、2008 型、定員 223 名であった<sup>81</sup>。

42 型は、1975 年から 1985 年にかけて 14 隻がイギリス海軍へ就役し、またこの戦争前にアルゼンチン海軍にも 2 隻が就役していた。当時の 42 型の諸元は、満載排水量 4,100 トン、全長 125 メートル、機関出力合計 56,000 軸馬力、最高速度 29 ノット、武装：114 ミリメートル砲 1 門、20 ミリメートル機関砲 2 門、シー・ダート艦対空ミサイル 2 連装発射器 1 (搭載数 24 発)、対潜魚雷発射管 6 門、搭載機リンクス・ヘリコプター 1 機、レーダーは監視および目標表示用 992Q 型、捜索用 965R 型または 1022 型、シー・ダート火器管制用 909 型 2 基、航法用 1006 型、ソナーは 183M 型、162M 型、定員 268 名であった<sup>82</sup>。

#### (d) フリゲート艦

フリゲート艦は、21 型(Type 21 class)の「アンテロープ(HMS Antelope)」、「アクティヴ(HMS Active)」、「アムバスケード(HMS Ambuscade)」、「アロー(HMS Arrow)」、「アラクリティ(HMS Alacrity)」、「アーデント(HMS Ardent)」、「アヴェンジャー(HMS Avenger)」の 7 隻、リアンダー級(Leander class)の「マナーヴァ(HMS Minerva)」、「アーゴノート(HMS Argonaut)」、「ペネロピ(HMS Penelope)」、「アンドロメダ(HMS Andromeda)」の 4 隻、12 型改級(Modified Type 12 class)の「ヤーマス(HMS Yarmouth)」、「プリマス(HMS Plymouth)」の 2 隻、合計 13 隻が使用された。

21 型は、1974 年から 1978 年までにイギリス海軍に就役し、その諸元は、満載排水量 3,250 トン、全長 117 メートル、機関出力合計 56,000 軸馬力、最高速度 30 ノット、武装：114 ミリメートル砲 1 門、20 ミリメートル機関砲 2 門、艦対艦エクゾセ・ミサイル 4 基、シー・キャット艦対空ミサイル 4 連装発射器 1 基 (搭載数 20 発)、Mk46 魚雷発射管 6 門 (後期型のみ)、搭載機リンクス・ヘリコプター 1 機、レーダーは監視および目標指示用は 992Q 型、航法用は 978 型、シー・キャット火器管制用は GWS24 が 2 基、砲火器管制用は Orion RTN-10X WSA 4 型、ソナーは 184M 型、162M 型、定員 175 名であった<sup>83</sup>。

リアンダー型は、1963 年から 1973 年にかけて合計 26 隻が就役し、3 種類の形式があった。この戦争で使用された型は、「アンドロメダ」が 3 型(Batch 3)であり、その他は 2 型(Batch 2)であった。2 型の諸元は(カッコ内は 3 型を示す)、満載排水量 3,200 (2,962) トン、全長 113.4 メートル、機関出力合計 30,000 軸馬力、最高速度 28 ノット、武装：40 ミリメートル機関砲×2 (114 ミリメートル砲 2 門、20 ミリメートル機関砲 2 門)、艦対艦エクゾセ・ミサイル 4 基 (無し)、シー・キャット艦対空ミサイル 4 連装発射器 3(1)基、搭載機はワズプ・ヘリコプター 1 機、レーダーは対空監視用が 965 型、対空・水上警戒用は 994 型、火器管制用は MRS 3/GWS 22 型、航法用は 978 型または 1006 型、ソナーは 184 型 (2016 型)、定員 223 (260) 名であった<sup>84</sup>。

12 改型は、1960 年から 61 年の間にイギリス海軍に就役し、1966 年から 72 年の間に近代化改修が行わ

<sup>81</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 552.

<sup>82</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 553.

<sup>83</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 554.

<sup>84</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 555.

れた。12 改型の当時の諸元は、満載排水量 2,800 トン、全長 112.8 メートル、機関出力合計 30,000 軸馬力、最高速度 30 ノット、武装：114 ミリメートル連装砲 1 基、リンボ 3 連装爆雷投射機 1 基、シー・キャット艦対空ミサイル 4 連装発射器 1 基、搭載機 ワズプ・ヘリコプター 1 機、レーダーは捜索用が 994 型、火器管制用は MRS 3 型、航法用は 978 型、定員 235 名であった<sup>85</sup>。

#### (e) 強襲揚陸艦

この戦争で、イギリス海軍は保有していた「イントレピッド(HMS Intrepid)」および「フィアレス(HMS Fearless)」2 隻の強襲揚陸艦を投入した。この強襲揚陸艦は、海兵隊上陸作戦部隊を数百人単位で収容し、上陸揚収艇数隻を沖合から発進させることができる。また上陸作戦部隊の指揮設備とそのための作戦室を持ち、上陸作戦実施前から実施中に至るまで司令部としての機能を果たす。しかし 1981 年の国防政策見直しの結果、「イントレピッド」は 1982 年に、「フィアレス」は 1984 年に除籍される予定だった。開戦時に「イントレピッド」は、予備役あるいは処分のためポーツマス(Portsmouth)港で解体作業中であった。それがアルゼンチンのフォークランド占領にともない、急遽復旧作業を行い現役に戻された。「イントレピッド」の元乗員は急遽集められ、再度この艦に乗組むこととなった。「イントレピッド」はポーツマス港を 4 月 15 日に出港し、4 月 26 日にポートランド(Portland)港から南大西洋へ向かった<sup>86</sup>。

両艦とも同型艦であり、1965 年から 1967 年の間に就役した。その諸元は、満載排水量 12,12 トン、全長 158.5 メートル、機関出力 22,000 軸馬力、最高速度 21 ノット、航空関係装備はウェセックス・ヘリコプター 5 機分の航空甲板を備え、搭載艇は中型上陸揚収艇(Landing Craft, Medium: LCM)4 隻、車両兵員上陸揚収艇(Landing Craft, Vehicles and Personnel: LCVP)4 隻、戦車 15 両、3 トン・トラック 7 台、1/4 トン・トラック 20 台、兵員 380~400 名、過積載 700 名、武装：40 ミリメートル機関砲 2 門、シー・キャット艦対空ミサイル 4 連装発射器 4 基、定員 580 名であった<sup>87</sup>。

#### (f) 哨戒艇等

沖合哨戒艇(Offshore Patrol Vessels)として、「リーズ・キャッスル(HMS Leeds Castle)」、「ダンバートン・キャッスル(HMS Dumbarton Castle)」を 2 隻 (満載排水量 1,450 トン)、氷海警備船(Ice Patrol Ship)として「エンデュアランス(HMS Endurance)」1 隻 (満載排水量 3,600 トン)、機雷掃海艇として、「コーデラ(HMS Cordella)」、「ファーネラ(HMS Farnella)」、「ノーゼラ(HMS Northella)」、「ジュネラ(HMS Junella)」および「ピクト(HMS Pict)」(以上排水量 1,238~1,615 トン)が本戦争で使用された。また測量船(Survey Vessel)では、「ヘクラ(HMS Hecla)」、「ヘラルド(HMS Herald)」、「ハイドラ(HMS Hydra)」

<sup>85</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 557.

<sup>86</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, pp. 543, 559; Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 65, 68; Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 433.

<sup>87</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, p. 550.

の3隻が南大西洋に派遣されたが、任務は病院船(Ambulance Vessel)であった<sup>88</sup>。

c イギリス艦隊補助部隊(RFA)の支援船舶

(a) 艦隊給油艦(Fleet Oiler)

艦隊給油艦は、O型(O class)2隻(満載排水量33,240トン)、およびタイド型級(Tide class)2隻(満載排水量25,930トン)が使用された<sup>89</sup>。

(b) 支援給油艦(Support Oiler)

支援給油艦は、「ピアリーフ(RFA Pearleaf)」(積載量18,798トン)と「プラムリーフ(RFA Pulmleaf)」(積載量19,200トン)ならびにアップルリーフ型(Appleleaf class)3隻(積載量33,750トン)が使用された<sup>90</sup>。

(c) 艦隊補給艦(Fleet Replenishment Ship)

艦隊補給艦は、リソース型(Resource class)2隻(積載量18,030トン)およびフォート型(Fort class)2隻(積載量8,300トン)が使用された<sup>91</sup>。

(d) 物資支援船(Store Support Ship)

物資支援船は、「ストロムネス(RFA Stromness)」(積載量7,780トン)が参戦した。この船は、アルゼンチンがフォークランドを占領した時点では予備役に編入されていたため、急遽現役に復帰した<sup>92</sup>。

(e) ヘリコプター支援船(Helicopter Support Ship)

ヘリコプター支援船は、「エンガディーン(RFA Engadine)」が使用された。本艦の諸元は、満載排水量9,000トン、全長129.3メートル、搭載機ウェセックス・ヘリコプター4機、ワズプまたはシー・キング・ヘリコプター2機であった。この船は、完全排除水域(Total Exclusion Zone: TEZ)内、さらにはサン・カルロス水域でヘリコプターの運用支援と給油母体として活動した<sup>93</sup>。

(f) 後方揚陸船(Logistic Landing Ship)

後方揚陸船として、サー・ランスロット級(Sir Lancelot class)6隻がこの戦争で使用された。この級の船は、船首と船尾から傾斜板が出て積み下ろしができるほか、船内の各層も傾斜路で結ばれている。また

<sup>88</sup> Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 361-362.

<sup>89</sup> Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p. 363.

<sup>90</sup> Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p. 363.

<sup>91</sup> Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p. 364.

<sup>92</sup> Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 65, 68; *Jane's Fighting Ships 1982-83*, p. 570.

<sup>93</sup> *Jane's Fighting Ships 1982-83*, p. 558; Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 435.



車両整備の施設も設けられている。本級の諸元は、満載排水量 5,674 トン、全長 125.1 メートル、搭載物 戦車 16 両、各種車両 34 両、燃料油脂 120 トン、弾薬 30 トンであった<sup>94</sup>。

#### d イギリス海上補助機関(Royal Maritime Auxiliary Service: RMAS)

イギリス海上補助機関は、曳船 1 隻、係留船 1 隻をこの戦争に派遣した<sup>95</sup>。

#### e 徴用商船(Ships Taken Up From Trade: STUFT)

商船の徴用は、1982 年 4 月 4 日に発出された緊急勅令(Order-in-Council)により実施された。この勅令によりイギリス商務省(Department of Trade)は、イギリス船籍の船であれば、船の所在地および実際の所有者の国籍にかかわらず徴用できる権限が与えられた。船舶の所有者には、徴用されている間の逸失利益および船の運行経費について、イギリス政府が補償した。もちろん徴用船が損傷を受けた場合、あるいは沈没した場合、イギリス政府が補償した<sup>96</sup>。

この戦争では、病院船、掃海艇支援船、係留船、飲料水タンカーとして各 1 隻、工作船として 2 隻、海難救助曳船として 3 隻、支援給油船として 12 隻、基地貯蔵タンカーとして 2 隻、貨物船として 5 隻、航空機輸送船として 4 隻、通報艦として 2 隻、人員車両輸送船として 9 隻を徴用した。また機雷掃海艇 5 隻も乗員は海軍軍人であるが、船はトロール船を徴用したものであった<sup>97</sup>。

### 第 3 項 イギリス軍の航空兵力

#### a 全般

イギリスの航空兵力は、空軍(Royal Air Force: RAF)、海軍航空隊(Fleet Air Arm: FAA)、陸軍航空隊(Army Air Corps: AAC)、海兵隊がそれぞれ保有していた。

#### (a) 空軍

イギリス空軍は、この戦争当時に第 2 線機、練習機等も含めて総計約 1,380 機、第 1 線の固定翼機だけで約 590 機を保有していた。しかしイギリスにとってフォークランド諸島は、前進基地となった一番近いアセンション島からでも約 6,000 キロメートル離れていた。空軍としてアセンション島から直接フォークランド諸島等の戦域に投入できた航空兵力は、バルカン戦略爆撃機(Vulcan)、ニムロッド洋上哨戒機、輸送機ハーキュリーズ(Hercules)および空中給油機ヴィクター(Victor)の長い航続力を持つ機種に限られた。当時空軍の持っていたファントム(Phantom)FGR.2、トネード(Tornado)GR.1、バッカニア(Buccaneer)S.2 およびジャガー(Jaguar)GR.1 という戦闘攻撃機/攻撃機はフォークランド諸島の戦域では一切使われな

<sup>94</sup> *Jane's Fighting Ships 1980-81*, p. 566; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 434-435.

<sup>95</sup> Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p. 365.

<sup>96</sup> A.D. Baker III, "Sealift, British Style," *U.S. Naval Institute Proceedings* (vol. 109, no. 6, Jun. 1983), p.111.

<sup>97</sup> Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 365-370; Hobson, *Falklands Air War*, p.197.

かった<sup>98</sup>。その他にこの戦争で使用された空軍機は、垂直離着陸のできるハリヤー(Harrier) GR.3 攻撃機とチヌーク(Chinook)ヘリコプターであった。これらは船に搭載されてフォークランド諸島まで運ばれるか、空中給油を受けて直接航空母艦へ着艦した<sup>99</sup>。

なお、直接アルゼンチン軍と交戦しなかったが、ファントム(Phantom) FGR.2 の 3 機がアセンション島ワイドアウェイク(Wideawake)飛行場に配備され、アセンション島の防空任務についた。また空軍のシー・キング(Sea King) HAR.3 ヘリコプターのうち 1 機が、同じくワイドアウェイク飛行場に配備され、各種輸送任務に使用された。輸送機の VC-10 もイギリス本土からアセンション島までの貨物輸送やモンテビデオでのイギリス人捕虜引取り等で使用された<sup>100</sup>。

#### (b) 海軍航空隊

イギリス海軍航空隊は、この当時練習機・連絡機等も含めて 300 機を超す航空機を保有していた。このうち戦闘任務に使用できるのは、戦闘攻撃機シー・ハリヤーFRS.1 を約 20 機と、対潜ヘリコプターのシー・キング(Sea King)HAS.1/2/5 を 58 機、リンクス(Lynx)HAS.2 を 34 機、ワズプ(Wasp)HAS.1 を 33 機、ウェセックス(Wessex)HAS.3 を 14 機ならびに輸送ヘリコプターであるシー・キング HU.4 を 10 機、ウェセックス HU.5 を 57 機であった。これらヘリコプターの第 1 線の機数の合計は 200 機強であった。シー・ハリヤーは全機が、ヘリコプターは約 130 機がこの戦争に投入された(アルゼンチン降伏後に投入されたものを含めると約 160 機)<sup>101</sup>。

既述のように、イギリスでは CTOL 航空機の離着艦可能な航空母艦が 1978 年に退役した。その航空母艦に搭載されていたターボプロップ艦上空中早期警戒機フェアリー・ガネット(Fairy Gannet) AEW.3 もその時に除籍されていた。したがってフォークランド戦争でイギリス任務部隊は、空中早期警戒機なしで作戦を行わなければならなかった<sup>102</sup>。

#### (c) 陸軍航空隊・海兵隊

この当時イギリス陸軍航空隊は、スカウト(Scout) AH.1、アルエット II、およびガゼル(Gazelle) AH.1 の第 1 線ヘリコプターを約 260 機、海兵隊は、スカウト AH.1 とガゼル AH.1 ヘリコプターを 18 機保有していた。固定翼機はどちらも保有していなかった。このうち、アルゼンチン降伏までに、陸軍航空隊および海兵隊合せてガゼル 15 機とスカウト 12 機を運用した<sup>103</sup>。

#### b 戦闘機

<sup>98</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 29; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 363, 393, 401, 405.

<sup>99</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 371, 387.

<sup>100</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 413-418.

<sup>101</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 28; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 259-266, 289-296, 317-322, 334-335.

<sup>102</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 243.

<sup>103</sup> *Military Balance 1981-1982*, p. 28; Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 158.

イギリスがこの戦争に投入した戦闘機は、海軍のシー・ハリヤーFRS.1のみであり、かつこの戦争に投入されたのは、合計 28 機に過ぎない。シー・ハリヤーとその搭載兵装ならびに良く訓練されたパイロットの優秀性は、空戦初日に示され、以後アルゼンチン空軍は、フォークランド戦域へ向かう航空機に対して護衛の戦闘機を付けることを諦めた。シー・ハリヤーは航空戦における優秀さだけではなく、エンジンおよび各システムの故障率が低く、常時高稼働率を維持した。またジェット戦闘機としてほとんど唯一のV/STOL能力は、普通の艦上機であれば離着艦できない気象・海洋条件でも運用を可能にし、作戦実行条件を拡大した<sup>104</sup>。

数少ない問題は、常時フォークランド周辺の航空優勢を保つことができず、アルゼンチンの航空攻撃により艦船が許容の範囲内であるが被害を受けたことだろう。これは1つには、シー・ハリヤーの航続力が短く、長時間作戦空域にとどまらなかったことである。これはペガサスエンジンの幅に機体の幅が制限されてしまうことと、エンジンが双発型式でないことなど、エンジンがもたらした根本的問題だろう。その他の点では、航空母艦を1隻も失うことができないイギリス任務部隊が航空母艦を可能な限りフォークランド諸島から250カイリ東方海域にとどまらせたことと空中早期警戒管制機を保有していなかったことが、迎撃機を効率的に運用できなかった原因として挙げられる。それでもシー・ハリヤーの高い性能は、艦対空ミサイルと共にアルゼンチン軍攻撃機を低空においやり、航続力の減少と爆弾信管の不作動をもたらしたし、一度会敵すれば高い確率で撃墜することができた<sup>105</sup>。この戦争で使われた兵器システムの中で、高い評価を得た1つであろう。

### c 攻撃機

空軍のハリヤー攻撃機は、ジェット・エンジンの推力方向を変更することにより垂直離着陸が可能な世界最初の実用機であった。この特徴から空軍機であっても艦船からの作戦が可能であり、またフォークランド東島に作られた臨時の飛行場からでも作戦できたのであった。地上攻撃を主任務に作られた航空機であり、ハリヤーがこの戦争で地上攻撃を担当することにより、シー・ハリヤーを防空任務に専念させることができた。これは、上陸作戦および陸上作戦を成功させるために、1隻も失うことのできない航空母艦を守るうえで重要なことであった。またハリヤーの地上攻撃は、陸上作戦を遂行する上で大いに役立った<sup>106</sup>。

この戦争では、第1(戦闘機)飛行中隊(1(fighter) Squadron: 1(F)Sqn)がハリヤー攻撃機を運用した。アルゼンチン軍降伏までに10機のハリヤーがフォークランド諸島で使用された。またアセンション島にファントムが展開するまでの間、ハリヤーが防空任務を行った<sup>107</sup>。

ハリヤーはアルゼンチンがフォークランド諸島を占領した後、急遽改造が行われた。揺動する航空母艦

<sup>104</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 189; Hobson, *Falklands Air War*, pp. 156-157.

<sup>105</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 190.

<sup>106</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 371.

<sup>107</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 371-373.

の甲板上に機体を固定するため、翼端にある補助車輪脚柱に固定用リングを取り付けた。車輪の操行装置とジェット・エンジンの排気口制御機構に小さな改造を行った。また機体外板の数カ所に小孔をあけ、侵入した海水が機内から排出されるようにした。I帯(8-10 GHz)の応答装置(transponder)を付加し、味方レーダーからの敵味方識別を容易にした。陸上部隊がレーザーで照射した目標を探知・照準する装置(Laser Ranger and Marked Target Seeker: LRMTS)が装備され、これによりレーザー・誘導爆弾の使用が可能になった。赤外線誘導空対空ミサイルの運用能力も付加され、AIM-9Gの運用が可能となった。電子・光学戦関連では、電子的に相手レーダーを妨害する装置「ブルー・エリック(Blue Eric)」と赤外線フレアを射出するALE-40が付加された。ハリアーの慣性航法装置は揺動する艦船内で立ち上げができなかったため、外部から位置データを供給する装置を開発した。しかし上手く作動しなかったため、ハリアーは艦船から発艦する時は目視による航法しかできなかった<sup>108</sup>。

#### d 爆撃機

空軍のバルカン爆撃機は、1952年に原型機が初飛行を行い、1950年代後半から60年代にかけてイギリス核運搬手段の主力の1つだった大型デルタ翼爆撃機である。しかしこの戦争が起きる前には、1982年6月末に全機が除籍される予定だった。またこの戦争での爆弾投下・ミサイル発射はバルカンの唯一の実戦使用となった。この戦争では、合計4機のバルカンB.2がアセンション島に展開し3機が作戦任務に使用された。バルカン全機には、もともと空中受油装置が装備されていた。しかし長期間未使用であったため、徹底した装置の整備を必要とし、また乗員も空中給油訓練が必要であった。選ばれた機体には、航法能力向上のためカラセル慣性航法装置(Carousel INS)が搭載された。電子戦装置としてAN/ALQ-101ジャマー・ポッドが追加搭載された。また2機のバルカンには、フォークランドに展開するアルゼンチン軍の地上レーダーを破壊するために、アメリカ製の対レーダー・ミサイルAGM-45シュライク(Shrike)が発射できるように改修された<sup>109</sup>。

この戦争で、バルカンはレーダー照準による通常爆弾の爆撃を3回、対レーダー・ミサイル発射作戦を2回行った。約6,000キロメートル離れた前進基地から、空中給油を何回も行って実施した爆撃は、十分賞賛に値するものである。しかしその成果は、目的である滑走路に1発しか命中しなかった。また目的としたレーダー破壊はできなかった。しかし戦略的には、アルゼンチン軍に、イギリス軍が十分アルゼンチン本土を爆撃する能力があることを示し、アルゼンチン軍航空兵力をアルゼンチン南部への集中を阻むことができた<sup>110</sup>。

#### e 哨戒機

この戦争に使用されたニムロッドR.1、MR.1およびMR.2は、4発ジェット哨戒機であって、世界初の

<sup>108</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 372.

<sup>109</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 363, 368, 370.

<sup>110</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 363-367; Hobson, *Falklands Air War*, pp. 160- 161.

ジェット旅客機コメット(Comet)を原型として徹底的な改造を加えたものであった。ただし R.1 は電子偵察機である。この戦争でニムロッドは、アセンション島などを基地として、アルゼンチン海軍水上艦艇の動向監視と、対潜水艦哨戒を行った。明確ではないが、電波情報収集も行っていたと思われる。副次的任務として、ハリヤーなどが大西洋上を長距離飛行する時、救難捜索機としての任務も行った。12機がこの戦争で使用された<sup>111</sup>。

一部の機は空中給油装置を装備し、哨戒飛行時間を延伸している。また一部の機には赤外線誘導空対空ミサイル AIM-9G を装備できるように改修された。これは自衛の意味もあるが、この情報がアルゼンチンに流れて、ボーイング 707 による長距離哨戒を放棄するのではとの思惑もあった<sup>112</sup>。

#### f 空中早期警戒機

海軍のターボプロップ艦上空早期警戒機フェアリー・ガネット AEW.3 は、1978 年に退役していた。空軍に旧式な 4 発レシプロ・エンジンの空中早期警戒機シャクルトン(Shackleton) AEW.2 があったが、使用に耐えるものではなかった。アセンション島を基地とするニムロッド MR.2 は、イギリス任務部隊へ早期警戒情報を提供できたが、フォークランド諸島周辺となると航続距離は限界となり、空中給油機の支援を受けたとしても、常時任務部隊上空を監視することはできなかった<sup>113</sup>。

イギリスは空中早期警戒機を保有しないでこの戦争に挑んだが、5月4日にシュペル・エタンダールから発射されたエグゾセ・ミサイルでミサイル駆逐艦「シェフィールド」を失うと、任務部隊に早急に空中早期警戒機を提供できないか、あらゆる方法が検討された。第1に、退役して残存しているガネット AEW.3 を飛行可能・運用可能な状況にできないか、詳細に検討が行われた。しかし膨大な費用がかかり、また熟練工がいないので完成まで長時間を要することがわかった。さらに現有航空母艦の「ハーミーズ」および「インヴィンシブル」の飛行甲板の先端部には上向の角度が設けてあり、ガネット AEW.3 の運用が不可能であった。また当時空軍のニムロッドを空中早期警戒機に改造する計画(ニムロッド AEW.3)が進行中であったが、そのプロジェクトの完成はまだまだ先の話であった(結局ニムロッド AEW.3 の開発は失敗し中止となった)<sup>114</sup>。

ウェストランド(Westland)社は、この戦争の前から自社製のシー・キング・ヘリコプターへ、ニムロッド MR.2 に搭載されているサーチウォーター(Searchwater)・レーダーを搭載する研究を行っていた。イギリス国防省は、この案を承認し、5月23日に既存の2機のシー・キング HAS.2 にレーダーを搭載することをウェストランド社へ命じた。しかし戦争には間に合わず、初号機(シー・キング AEW.2A)は7月23日に初飛行した。試験終了後この2機は、これも戦争後に就役した空母「イラストリアス」に搭載され、

<sup>111</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 401-404; Hobson, *Falklands Air War*, p. 160.

<sup>112</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 402-403; Ethell, Price, *Air War South Atlantic*, p. 155.

<sup>113</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 243.

<sup>114</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 243.

南大西洋に派遣された<sup>115</sup>。

#### g 空中給油機

この戦争開戦時にイギリスは空中給油機ヴィクターK.2を23機保有していた。当時輸送機のVC-10を空中給油機へ改造する計画が進行中であったが、その初号機が初飛行したのは、1982年6月22日であり、戦争には間に合わなかった。ヴィクターは、もともとバルカンと同じ要求仕様書で製作された戦略爆撃機であった。しかし原子力潜水艦搭載のポラリス・ミサイルに核運搬手段の座を明け渡し、1970年代に空中給油機へ改造されたのだった。この戦争でヴィクターは空中給油任務だけではなく、長距離海上レーダー哨戒と写真偵察任務も行った。そのため搭載レーダーの改修が行われ、機首にカメラが爆撃機の時以来再び搭載された。また航法装置もオメガ航法装置からカラセル慣性航法装置に交換された。この戦争では、22機が使用され、スタンレー空港爆撃作戦や長距離哨戒任務等の実行に不可欠な存在であった<sup>116</sup>。

#### h 輸送機

イギリス空軍の長距離輸送機はハーキュリーズC.1/C.3とVC-10が担っていた。ハーキュリーズC.1は、アメリカ製のロッキードC-130Hハーキュリーズをイギリス空軍仕様にしたものであり、C.3はC.1の胴体を15フィート延長したものである。当時空軍はC-130を54機保有していた。このうち何機がこの戦争に関係する任務を行ったかは明確でないが、長期修理等の機体を除けば、ほとんど全機がかかわったと考えられる。C-130はイギリス空軍輸送機兵力の主力をなし、イギリス本土からアセンション島へ大量の人員と貨物を輸送し、その功績は大きいものがあつた。またC-130は、フォークランド周辺に所在するイギリス艦隊へ、緊急を要する物資、郵便、兵員の空中投下も行った。この空中投下は、長い航続力を要求されるため、機体内に燃料タンクを増設した。増設により搭載量が制限されるため、改造された機数は限られた<sup>117</sup>。

空中受油装置の装備がアルゼンチン軍が降伏する前までに6機に行われた。空中給油機であるヴィクターK.2の最小水平巡航速度よりC-130の最大水平巡航速度は20ノット(約37キロメートル毎時)低かった。そのため両機が降下率毎分500フィートで降下しながら空中給油を行うという手順が編み出された。またC-130を空中給油機へ改造することもこの戦争中に行われたが、アルゼンチン軍降伏に間に合わなかった<sup>118</sup>。

VC-10 C.1は、原型はイギリスのヴィッカーズ(Vickers)社が開発した長距離4発ジェット旅客機VC-10で、それをイギリス空軍の仕様に改めたものであつた。この戦争開戦時には13機保有しており、全機がこの戦争のための空輸任務を行った。イギリス本土とアセンション島間の空輸だけでなく、アルゼンチン

<sup>115</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 243-244, 260, 262.

<sup>116</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 393-399; Hobson, *Falklands Air War*, p. 160.

<sup>117</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 405-407; Hobson, *Falklands Air War*, p. 159.

<sup>118</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 407-408.

軍がフォークランド諸島およびサウス・ジョージア島で捕虜としたイギリス兵・官吏のモンテビデオでの受取りも行った<sup>119</sup>。

#### i ヘリコプター

##### ・チヌーク

イギリス空軍のチヌーク HC.1 は、ボーイング・ヴァートル・CH-47C チヌークをイギリス空軍の仕様にした型である。この戦争では、最大の搭載量を誇るヘリコプターだった。フォークランド諸島へは当初 4 機を「アトランティック・コンベアー」へ搭載し運搬する予定であった。しかし 5 月 25 日にこの船がエグゼ・ミサイルにより撃沈され、3 機が船と運命を共にした。すでに輸送作業に就いていた 1 機だけが損失をまぬかれた。この 3 機の損失はイギリス軍の陸上作戦の進捗を大きく遅らせることとなった。被害をまぬかれた 1 機は、東フォークランド島で L118 軽砲 2 門と 22 名の兵員を機内に搭載し、機外にもう 1 門の L118 軽砲を懸吊して、夜間暗視眼鏡を使用して地面すれすれを飛び重要地点に運搬した。イギリス空軍はチヌーク 7 機を追加派出したが、最初の 1 機はアルゼンチン軍降伏の日に着陸となった。それらのチヌークは、戦後の戦場清掃等で威力を発揮した<sup>120</sup>。

##### ・シー・キング

ウェストランド社のシー・キングは、もともとイギリス海軍の対潜戦用ヘリコプターの開発要求に対し、同社がアメリカのシコルスキー社から取得した S-61 ヘリコプターのライセンスを基に、エンジンと搭載装備を大幅に変更したものであった。その後シー・キングは対潜戦のみならず、貨物輸送、戦術兵員輸送、救難捜索、負傷者収容等さらには前述の空中早期警戒機に用途が広がったのであった<sup>121</sup>。シー・キングはこの戦争に海軍機 49 機、空軍機 1 機と合わせて 50 機が投入され、単一機種としては最高の機数であった<sup>122</sup>。

このうち第 820 および第 826 海軍飛行中隊(Naval Air Squadron)のシー・キング HAS.5 計 20 機は、イギリス任務部隊の対潜警戒のため膨大な時間を飛行した。第 846 海軍飛行中隊の 14 機のシー・キング HC.4 は洋上では各艦との連絡・輸送任務に、上陸作戦以後では陸上部隊の補給・支援等任務に就いた。第 824 海軍飛行中隊の 5 機のシー・キング HAS.2A はイギリス艦隊補助部隊の艦船に搭載され、対潜警戒任務および各種輸送任務を行った。第 825 海軍飛行中隊は、1982 年 5 月 3 日に各種後方任務とフォークランド諸島に展開する陸上部隊を支援するため編成を命じられた部隊で、10 機のシー・キング HAS.2/2A が他の部隊から引き抜かれ編成された。HAS は対潜ヘリコプターであるが部隊の任務からソナーを撤去され、陸

<sup>119</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 411-412; Hobson, *Falklands Air War*, p. 160.

<sup>120</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 387-392; Hobson, *Falklands Air War*, p. 159.

<sup>121</sup> *Jane's All the World's Aircraft 1978-79* (London: Jane's, 1978), pp. 243-245.

<sup>122</sup> Hobson, *Falklands Air War*, pp. 157, 182.

軍との通信用の無線機を搭載した。本部隊も戦争中短期間に膨大な飛行時間を記録した<sup>123</sup>。

#### ・ウェセックス

イギリス海軍のウェストランド・ウェセックス・ヘリコプターは、総計 48 機（「アトランティック・コンベアー」に搭載され、エグゾセ・ミサイルの被弾炎上により損失した 6 機を含む）が、アルゼンチン降伏までの間、南大西洋方面に派遣された。このうち 2 機は対潜型 HAS.3 で、艦艇に搭載され、対潜哨戒および各種輸送任務に使われた。残りはすべて、HU.5 で各種輸送や陸上部隊の支援にあたった。本機は当時、旧式と見なされていたが、機体の頑丈さはこの戦争に向いていた。しかし航法装置等が基本的なものであったため、夜間飛行や悪天候時は飛行に制限を受けた<sup>124</sup>。

#### ・リンクス

イギリス海軍のウェストランド・リンクス・ヘリコプターは、中型の対潜ヘリコプターで、ワスプとウェセックスの後継機であった。この戦争では 34 機が投入され、航空母艦以外のイギリス海軍艦艇に搭載された対潜ヘリコプターの主力であった。対潜任務以外にも艦船間等の連絡および物資・人員の輸送を行った。リンクス HAS.2 は信頼性も性能も優秀なヘリコプターであった<sup>125</sup>。

#### ・ワスプ

当時小型対潜ヘリコプターであったイギリス海軍のウェストランド・ワスプ HAS.1 は、大部分がリンクスに交代していた。しかし一部の旧型のフリゲート艦にはワスプが搭載されていた。8 機が投入された。この戦争で目覚ましい活躍は、見られなかったが、サウス・ジョージア島奪回作戦で対戦車ミサイルによりアルゼンチン海軍潜水艦「サンタ・フェ」を擱座させている<sup>126</sup>。

#### ・スカウトおよびガゼル

ウェストランド・スカウト AH.1 は、1958 年に初飛行した小型汎用ヘリコプターで、これの海軍型がワスプである。ガゼルは、フランスのエアロスペシャル社が 1967 年に初飛行させた小型汎用ヘリコプターで、フランスとイギリスの間でウェストランド社が生産を分担することで合意された。イギリスは自国の陸海空軍用に約 200 機を発注した<sup>127</sup>。

これらの軽ヘリコプターは陸軍と海兵隊に所属し、道路もなく泥炭地と岩石におおわれたフォークランド諸島で、末端の陸上部隊のまでの物資の補給に欠かせないものとなった。偵察、対戦車ミサイルによる

<sup>123</sup> Hobson, *Falklands Air War*, pp. 157; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 237-266.

<sup>124</sup> Hobson, *Falklands Air War*, pp. 158; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 289-296.

<sup>125</sup> Hobson, *Falklands Air War*, p. 158; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 289-296.

<sup>126</sup> Hobson, *Falklands Air War*, p. 158.

<sup>127</sup> *Jane's All the World's Aircraft 1968-69* (London: Jane's, 1968), pp. 197-198; *Jane's All the World's Aircraft 1978-79*, pp. 41-42, 248.



地上攻撃、そして最前線からの負傷者の救出に用いられた<sup>128</sup>。

---

<sup>128</sup> Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 158.